約十三〇哥前
十一〇八、
九、約十〇十
四廿八、
〇二〇二
十〇提後
四八、〇約廿
二、〇十
三、十四

幾くはイエスの力に依頼するを得ん。此に於てか諸君即ちパウロを得て、し、『我は我が信ずる者を知る、我はイエスの甚だ我を愛し給ふを知る、我はイエスの我が抵當を守り得るとを知り且つ確信す』と。諸君願くは馳せて信仰の確信に達せよ。又イエスに其抵當を託せよ。イエスの御手に全く己れを献げ、又凡てのものを献げよ。深くイエスの力を考へ、全くイエスに依頼せよ。イエスと共に住みて諸君の信ずるイエスとは果して誰なるかを常に知れ。

弱年なるキリストの弟子よ、願くはエホバは爾曹をまもるものなりて、ふ言を受けよ。弱きにも、誘惑にも凡て何に拘はらず、其靈魂を抵當として、イエスに託するとを勉めよ。諸君即ち弱きにも之れに安んじ、誘惑に

詩廿一〇
四、三
八〇四
五、〇三
十九、三

も喜んで謳ふを得べし、是れ『エホバは凡の悪より爾曹を保ち給へばなり』(チ)

聖なるイエスよ我は主を我が守主となし奉る　願はくは「守主なるエホバ」と稱ふる主の聖名をして終日歌の如く我が心に響かせ給へ　何事にても主の祐助を要する度に之を主の聖手に委ね主は必ず之を守り給ふことを確信なさしめ給へ　アーメン

一　或所に一の婦人ありけり、己が短氣な制せんものと、多年の間切實の祈禱をなすとも、なかりしが、昔て其効を收むる能はざりき。然

るに此の婦人一日決心する所あり、其の熱心の祈りに由り、短氣に克つの力を得ざる以上は、また室内を出でゝとさせり。斯くて此婦人は最早大丈夫なりと思ひ、其室内を出で、總て家事に取り掛るや否や、忽ち瞋づき、忽ち怒りを發したり。婦人は深く自ら恥つるの餘り涕を禁ずると能はず、急き其の室内に駈け入りたり。此の婦人の一女は、母よりも信仰の道を能く辨へたるものなりしが、此樣を見て母の許に往き、默めて曰く『母上よ、兒は御身の衝突を見參らせぬ。兒願はくば御身の爲めに妨害と思考するもを打ち明け候はんか』と。母曰く『然り我兒よ』と。『母上よ、御身は其の短氣を制せんとし給へり又主の助けを得て之れに勝たんと祈り給へり。是れ過てり。主は獨りにてそれをなさゞるべからず。御身は其知氣を擧けて悉く主に

献げざるべからず。されば主全く之を取り、且つ主御身を守り給ふべきなり』と。母は最初此を解すると能はざりき、されど後ち漸く分明し、而してイエスが吾人を守らせ給ふ人生の祝福を感ず、吾人が信仰に由りて得らるべき勝利を得たり。諸君亦此意を解せらるゝや否や

二　『エホバ我を助けて罪に打勝しめ給はざるべからず』とは全く新約書中に絶無の言なり。靈魂に於ける神の恩寵は吾人の助けとなるものにあらず、神は萬事を一身に負擔し給ふなり『聖靈は我を罪の法より釋せばなり』。

三　諸君何ものにても之を献げて主の保護に委れ奉る時心得べきこと二あり、一は之を全く主の手に委れ奉ると、一は已に委れし以上

は其僕主の許に止めぬ。イエスをして全く之を有たしめよ、イエス自ら處置して諸君の光榮を謀り給ふべし。

第廿章　能と弱きと

『我に言ひ給ひけるは我が恩なんぢに足れり蓋わが能は弱に於て全くなればなり。この故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん是れキリストの能われに宿らん爲なり之に因て我懦弱を樂みとせり蓋われ弱き時に強ければなり』――哥後十二〇九、十

○きてふ言はゞ基督信徒の生涯に於て、不完全に了解せられたる言は殆んど他に其の比類あるべからず。罪といひ、咎といひ、怠慢といひ、不從順といふ之をみな吾人の弱きの致す所なりとなす。斯く何事も其弱き

に歸する時は眞實に己が有罪を感ずると能はず、至誠以て進歩に奮勵するとも出來ざるべし。試みに思へ、我れ我力の到底及はざるを、なさずとするも、果して之を有罪といふを得るか、天父は己れ自ら獨立に爲し得るほどのとを其子たる吾人々類に要求すると能はず。成程舊約時代の律法によりては斯くしたるとも是れあれど、新約時代に至りては天父は亦斯くの如くなし給はざるなり。即ち天父は其の聖靈によりて、吾人に實行の力を備へ給ひしものゝ外は、絶えて之を要求し給ふとあらざるなり。新生命とは聖靈によりてキリストの力の中にある生命をいふなり。

抑も以上の如くに考ふるとの誤謬は、是れ人其の弱きを過重するが爲めにはあらで、却て之を賤しめ過ぐるが爲めなり。彼等は謂へらく我れ我が全力を盡くし、亦幾分の神の助けを假りて事を爲さんと、而して彼等は神の前にありて數ふるに足らぬ身分なるを悟らざるなり(イ)。諸君は思ふならん、我に倘ほ少しの力あり、天父たるもの我微力に其幾分の力を添へて我を助けざるべからずと。諸君こは謬想なり、諸君の弱きは事實之を證す、諸君は何事をもなし能はざるにあらずや。如かず我が全然無能力なるを公言せんには。――所謂る無能力とは即ち聖書の所謂る『弱き』てふ言の意味に於ていふなり。『我を離るゝ時は何事をも行能はざる也』『我儕の裏には能なし』(ロ)。

弱年の信徒たるもの若し此くの如く自己の弱きを認識し、承引せられ

なば、其時即ち是れオエスの能力の秘密を了解したるなり。且つ己れの強くなる日を待ち亦之が爲めに祈るも或はまた一層自己の強きを感ずるの日を待ち亦之が爲めに祈るも共に其愚なるを悟るは即ち此時にあり。然り、吾人は己れ無能力なるが故にオエスの力を恃まざるべからず。而して信仰を以てする時は即ち之を受くるを得べし。諸君此時宜しく思ふべし、此のオエスの力は即ち諸君の爲めのものにして、オエスの自ら諸君にありて働き、亦諸君によりて働き給ふべしと(九)。此時主の所謂る『我が力は爾の弱きに由りて完くなれり』との意義分明すべく、又た『我れ弱き時に我れ――然り、弱き時に我れ――強し』と答ふるを知らんぬ。げにや我は弱ければ弱きほど即ち強くなるなり。又此時パウロと共に

(哥後十一、三十、三、〇)　(同十二、〇、九)　(同十、三、四)　(詩十九、八十、百十八、十四、〇)　(詩十八、〇、廿、同十、二、八、〇)　(約十五、〇、哥前廿、同十、一、四、一十、〇)　(弗十八、一、〇、十、九、一十、〇)　(同十五、〇、哥後、一、〇、九)

に謳ふて云はん『我れ己が弱きことを誇らん』、『我は弱きに由りて樂あり』、『我が弱き時に我れ喜ぶ』と(一〇)。大凡そ己れの無一物に滿足し、亦無一物なるを感ずるに滿足し、常に生の力に依頼して生活するに滿足する信仰の生涯は、如何はあり光榮ある者なるかは實に驚くべき者あるなり。かゝる人は己が力として神を知るは、如何ばかり嬉しきことなるかを知る。『エホバは我力、我が歌なり』(ホ)。詩篇の中に屢々『我が力よ我れ汝にむかひて頌辭を歌ひまつらん、われらの力ある神に向ひて高らかに歌はん』とあるは即ち斯る人の生涯たるべきなり(ヘ)。又詩篇に或は『なんぢら榮と能とをエホバに捧げまつれエホバは其の民に力を與へ給ふ』といひ、或は『なんぢら能を神に歸せ

十八、同三
十九、同一〇
二十、同四〇
二十一、同四〇
二十二、同五〇
二十九、十〇
同六、十八、
同六、十八、二
〇八十一、同
詩二十九、一、同六十
十五、一八、〇三三
十六、
詩七十一、十六、
約書二〇、十四、

よ、イスラエルの神は其民に力と勢とを與へ給ふ』(ト)とあるの眞意を了解するものも亦此人なり。吾人若し凡ての力を悉く神に献げ、若しくは歸し奉る時は、神は再び吾人に之を與へ給ふべし。

『壯者よ我れ此書を爾曹に贈りしは爾曹剛健かの神の道なんちらの心に存りて惡者に勝てるに因てなり』。基督信徒は主にありて強きものなり(チ)。或時は強く、或時は弱きにはあらず、却て常に弱きなり、故に亦常に強きなり。信徒は只信じて己が力を知り、信じて己が力を用ふれば即ち足る。又他を慮かるの要なし。夫れ強くなるとは命令なり、吾人の從はざるべからざる論告なり、從順する時は即ち力は益加はるべし。『爾曹強かれ……エホバ爾の心を堅ふし給はん』。基督信徒たるもの宜しく信仰を

詩二十七、
十四、
同三十四、
同三十四、
〇廿四、
〇廿五、
〇廿五、
〇廿一、
〇廿一、
弗十、六、
〇

以て『主及び其大なる能に頼て剛健くなる可し』との命令を是れ奉せざるべからず(ヌ)。

主なるイエスの神榮光の父よ知識の靈とイエスの知恵の默示を我等に與へ給ふて主を信ずる者に授け給ふイエスの權勢の如何に強大なるかを悟らしめ給へ　アーメン

一　基督信從たるもの若し神に事ふること、或は聖めらるこさを六ケ敷きことなし、困難のこと思へる間は、決して之に進歩することあらざるべし。却て已れは到底之をなし能はざることを覺悟せさ

るべからず。若し此の覺悟ある時は、何事も自ら之をなすの徒勞を悔ゆるまた之をなさざるべからず、却て常りの我が中にありて働き得るやう己れを捨てゝ主に獻ぐべきなり。尙ほ此論の詳細を究めんと欲せば、教授ホフマヤー氏の名著『暗より光に』(Prof. Hofmeyr's Out of Darkness into Light)てふ一書の三篇第三章以下を一讀すべし。(原譯者曰く『ホッフマヤー氏は喜望峰殖民地なる和蘭改革教會神學校の上席教授なり』)

弱きを嘆ずるは往々にして自己の怠慢の遁辭に外ならざることあり。されど人若し能を得んと欲して之が爲めに勞を惜まずんば、キリストの中自ら此能ありて存す。

三『主及び其大なる力に頼て剛健なるべし』。讀者よ之を熱考あれ。

我は主に居り、又主の力に居らざるべからず。左すれば我は強くなるべし。主の力を得んと欲せば我は主に自ら我が有させざるべからず。力は主のものなり而して長く主のものなり、之に反して弱きは長く我が有なり。強き者、即ちイエスは弱きもの即ち我に働き給ふ。弱きもの即ち我は信仰によりて強きもの即ち主に居る。此を以て我は己が弱きを知ると共に亦己が強きを知るなり。

四　能は働きの爲めのものなり。此を以て戰に信仰篤きものたらんとして強くならんことを欲する人は、到底強くなることはあらざるべし、されど尙ほ己が弱きに頼着せず、飽くまでも主の爲めに働きを始むる人は、即ち必ず強くなるべきなり。

第廿一章　感情の生涯

「われら、見る所に憑らず、信仰に憑りて歩めばなり」（哥後五〇七）

「見すして信ずる者は、幸福なり」（約廿〇廿九）

「もし信ぜば神の榮を見べしと我なんぢに言しに非ずや」（約十一〇四十）

諸君の悔改に關し、其途を遮ぎる障碍物は蓋し感覺よりも大いなるはなし。諸君は、或ものを經驗せざるべからずとなし、又自から或ものを感じ或ものを悟らざるべからずと思ひしと恐らく多年に渉りしならん。

又別に何等の取り留めたるとあるにあらず、何等の感情あるにもあらざるに倘ほ神の言を信じ、又神は我を受け給へりと確信し、又我罪は赦されたりと確信するは、餘りに無謀のことなりと思はれたるならん。されど諸君は最後に至り、信仰の途は感情によらず、只神の道の途なるを承認せざるべからざるに至りしなるべし。而して是れ即ち諸君の為めに狹め道なりしなるべし。諸君は只信仰によりて救はれたり、又諸君の靈魂は信仰に由りて休安平和を得られたり(イ)。

されど是れより後、基督信徒として其月日を送る間にも、右の感情依然其の誘惑を退ぶし、最も頑固に最も危險なるものあり。感情てふ語は吾人之を聖書の中に存ずるを見ず、されど吾人の『感情』と呼ぶものを聖書

約三〇三
十六、羅廿
三、〇
八、同四十
〇五、同
〇六、同五十
〇一、

ロ代下七、二詩七〇十二、三十三、〇九、賽七、十四〇太三、十一、三十一、路五、〇五

「汝は『見る』といへり。而して聖書が絶えず吾人に語る所は、見ずして信ずるの信仰は救の道なりといふにあり。吾人の見る所を排して正しく信仰するとは、救の道なりといふにあり。『アオラハム信仰淺からざれば己が身の既に死るが如きを顧みざりき』。信仰とは只神の御言に依附するの謂なり。不信仰にして見んことを欲するものは却て見ることなく、信仰あるて必ずしも見ることを望まず、充分に神を信ずるものは、即ち神の榮光を見るべし(ロ)。感情の爲めに求むる人感情に就て泣く人は決して何等の得る所なかるべく、感情に頓着なき人は、却て豐かに之を得べし。『生命を全ふせんとする者は之を喪ひ、我が爲に生命を喪ふ者は之を得べし』。言を信ずる者亦然り、後には必ず聖靈によりて實眞の感情を與へら

約十二〇二十五、加三、〇二、十四、弗一、〇十三、

羅四〇二十一、十八、提後十一〇

るべきなり(ハ)。

神の諸子よ、願はくは信仰によりて生活するとを努めよ。諸君願はくは信仰は幸福の生涯に達する神の途なるとを確信せよ。たゞひ祈禱に活氣を感ずるとなき時も、たゞひ衰心に冷淡と緩慢を感ずる時も宜しく信仰に由りて生活せよ。其の信仰をして近きものに向はしめ、其の能力と忠信に向はしめ、たとひ己れは一物のオキスに獻ぐべきものなしとするも、オキスは必ず我に凡てのものを與へ給ふべきを信ぜよ。感情は當に自ら何事をか求むるものなり、信仰は常にオキスそのものを以て滿つるものなり(ニ)。諸君若し聖書を讀み、而して何等の興味、何等の祝福をも感ずるとなくば、信仰によりて宜しく再び之を讀むべし。神の言

二、來九、
〇五、六、
雅三〇十
六、同六、
〇十六、

羅十
三、五〇
十二、〇加
二、彼前
七、〇
八五、

は必ずや活動して祝福を與ふべし、故に曰く『神の言は信ずる者の中に働く』と。諸君亦愛するとを感せず、或はイエスの愛を信ずることなくとも信仰によりて宜しくいふべし、イエスは我が依然として彼を愛するを知り給ふと。諸君亦喜樂の感あるとなしせるも、イエスの中には我が爲めに言ふべからざる喜樂あるとを信ぜよ。信仰は祝福なり、夫凡そ喜樂より起る滿足を希はず、却て信仰より起る神の榮光を求むる人には、信仰乃ち此の人に喜樂を與ふべし(ま)。イエス曰く『見ずして信ぜし者は幸福なり』と。又曰く『滿ち信ぜば神の榮を見べしと我なんぢに言ひしに非ずや』と。イエスは確かに此言を履行し給ふべし。

基督信徒は感情の生涯と信仰の生涯との間に介在するものなり、されば日々其一を撰んで、之に生息せざるべからず。若し一たび堅く其一を撰び、而して毎朝此の撰擇を更新し、感情に制せられず、信仰にのみ是れ從ひ、神の聖意をのみ是れ奉ずる人は、福なるかな。信仰若し常に神の言に滿ち、神の言ひしものに滿ち、且つ此言によりて父なる神と子なる神とに滿つる時は、皇天上帝の生命の祝福を感ずるを得べきなり。感情は利己的なり、私慾的なり、信仰は神を敬し、亦神より榮めらるゝものなり。信仰は神を喜ばせ、信仰ある人は、其心に必ず己れが神より受けられたりとの證據を神より受くべきなり。

主なる神よ主が主の子供等に求め給ふ唯一の望は彼等が主を信任し

奉る信仰を以て常に主と師るにあり。主よ願はくは我をして見よ、さる主に堅く倚り凡の事を主に委ねる信仰を以て主を喜ばせ主を尊むることを我が唯一の幸福となすに至らしめ給はんことを　アーメン

一　げに新生活には一種奇なるものありて存す。弱年の信徒にして明かに之を看得せしむることは決して容易にあらず。若し長く聖霊に慣れ親しむる時は、神の聖霊、嘗て之を教へ給ふべきなり。イエスは実に山上説教の冒頭に此の生活の基礎を置き給ふて曰く「心の貧しき者は福なり天国は即ち其人のものなればなり」と。凡そ己の貧しきを感ずると共に又神の富有を感ト己が力の弱きを認むると共に、神の全能を認むることは、固さより霊魂中同時の感情たるとを得。必ずしも相衝突するとなし。是れ己れ一物を有せざるは、やがてキリストにありて凡て有する所以にして信仰の秘訣にあり。而して眞正なる信仰の秘訣は能く此理を活用せしめ、寂寥無聊の時にも尚ほ且つ我はキリストにありて凡てを有するとを知るあにり。

二　忘るゝなかれ、聖書に叙々として記載せらるゝ信仰は皆に行に反するのみならず、又感情に反するものなるとを。されば純潔なる信仰の生涯に有ては、皆に己が行を以て其救ひを求むるとを廃せざるべからざるのみならず、亦信仰を以て之を求むるとも廃せざるべからず。此を以て信仰をして常に感情を排斥せしめよ。感情者と雲にありては、我は罪人なり、我は暗きなり、我は弱と、我は愛し、

我は[illegible]む、一さいふもあら[illegible]、宣しく信仰をして言はしめよ。キリストにあり、不[illegible]我は聖し、我は光なり、我は強し、我は富めり、我は喜びなり。

約三七〇、十八、同十四〇、十七、廿六、使一〇四、

『なんぢら既に子たることを得しが故に神其子の靈を爾曹の心に遣りて父と呼ばしむ』――加四〇六

子なる神は是れ父なる神の大なる恩賜なり、天父は是によりて其救を成就し、且つ之を吾人に近きものとなせり。さて又一面には子なる神その父なる神より吾人に送り、吾人の内部の救、有効の救を完ふし給ふ大なる恩賜は、即ち聖靈なりとす(イ)。子なる神が父なる神を啓示し、又之を榮むる如くに、聖靈は即ち子なる神を啓示し、又た之れを榮む(ロ)。聖靈は

同二〇廿三、三〇哥前六　吾人の中にありて、イエスの中に準備せられたる、生命と救とを吾人に
約十五〇二十六、十四、十〇同五、二〇八哥前　傳遞し、之を全然吾人の有たしむるものなり(八)。イエスは今天にましま
十二〇同　せども、なほ亦其の聖靈によりて吾人の前に在し、吾人の中に住み
給ふ。吾人若しイエスを我が有とせんと欲せば、之が爲め必要なるとき二
伯十七、四〇　あり、他なし、吾人自身の罪を認むると及びイエスにある救贖を認む
一、羅八廿〇　と是れなり。而して信者の心裏に、此の二重の業を斷へず進行し給ふも
三〇二、弗十　のは即ち聖靈なり。聖靈は懲戒し、慰藉す、聖靈は罪を確認せしむ、聖靈は
七、十〇九、十　キリストを榮む(九)。

聖靈は罪を確認せしむ。聖靈は神の光なり、神の焰なり、罪は之によりて
暴露せられ、之によりて燒棄せらる。聖靈は『さばきする靈と燒つくす靈

賽四〇四、亞十二〇十一、太三、七〇二十一　なり』、神之れによりて其民を潔め給ふ(十)。吾人は其人を感ずると、未だ充
分深からずとて嘆息する人に遇ふ毎に、必ず悔改めの深さには別に制
限のあるなきを忠告せざるべからず。己れ自ら罪を感ずると充分深
からずとも、宜しく其儘にて日々イエスの許に行くべし、善し悔改の後
ちに於て、最も深く罪を感ずると決して珍らしからざれば、なり。又弱年
の悔改者に對しては吾人は只一言せん、諸君の中にある聖靈をして常
に罪を諸君に確認せしめよと。聖靈は必ず、諸君が前に只名ばかりを知
りし罪を、厭忌せしめ給ふべし。聖靈は必ず諸君の心の奥所に隱れて見
へざりし罪を、暴露し、慚愧を以て之を告白せしめ給ふべし。聖靈は必ず、
諸君が我にあらずと妄想し、又他人のを酷評せしめたる罪の諸君自身

詩百三十七、九　にもあるとを指摘し給ふべし(ヘ)。而して聖靈は諸君の罪より贖はれ、罪
二十三、十　より潔めらるゝため、能く教導誘掖し、諸君をして罪悪貫盈の他身を以
賽七、太七　てキリストの恩寵に托せしめ給ふべきなり。
○五、羅四　
○十四、哥前　愛する兄弟よ、聖靈は罪を暴露し、罪を燒棄すとて、神の光、神の焰として
同二十四、哥前　諸君の中にあり、神の殿は聖し、而して諸君實に此の神の殿なり。諸君の
廿五、廿　中にある聖靈をして罪を指摘し、罪を放逐するの全權を握らしめよ(ト)。
詩十九、同　聖靈諸君をして其の罪を知らしめたる上は、何事につけても、イエスは
百三十九、同　諸君の生命、諸君の聖潔なるを思ひ當らしめ給ふべし。
○廿三、哥前　而して後には聖靈罪を責むると同時に、亦慰藉を與ふべし。亦聖靈は諸
八、哥前　君によりてイエスを榮め、且つイエスにある凡てのものを取りて之を
三、哥後十　諸君に知らしめ給ふべし、亦聖靈はイエスの血の潔めの力に關し(チ)、又
七、同六十　イエスの諸君の中に宿りて諸君を保護し給ふ力に關し(リ)、諸君に之を
約壹一、同五　知らしめ給ふべし。亦聖靈は時々刻々イエスの諸君と共にあり、諸君の
○八、同五　爲め親しく其業を行ひ、全く字面通りに、全く完全に、全く確實にして少
約十四、○　しも相違なきとなるを知らしめ給ふべし。然り、活ける全能恒久のイエ
廿一、三、弗三、廿　スは聖靈によりて諸君の有たるべし、亦諸君は之を知るべく、且つ全く
○十、七、約壹三、○　之を樂むを得べし。聖靈は諸君を教へて其の罪惡と罪性とを一切イエ
廿四、○　スに携へ至らしむべく、且つ諸君の罪を完全に贖ふものは即ちイエス
三、四、○十同　なるを知らしむべし、又聖靈は聖潔の靈として凡の罪を排除し、以てイ
羅一、○　エスの諸君に宿るべき準備を整ふべし(ヌ)。
四、同五

○五、同八○二、十三、哥前二、一○
羅八○十四、十六、
哥前六○十九、
後一○廿二、同六、
弗一○十三、
加三、五、十二、四、同五、

愛する弱年の信徒諸君、聖靈爾の中にありてふ眞理を了解し、之を其の滿腔の精神とする爲め、時間を惜むとなかれ。此の眞理の眞理たる證據を神の言に求めよ(ル)。願くは聖靈を宿さずして寸刻だにもキリスト宿徒たらんと思ふなかれ。聖靈は信仰によりて來り、且つ働くものなるが故に諸君宜しく其の己が中に住み、大なる業をなし給ふことを滿腔の信仰たらしめよ(ヰ)。諸君の中にある聖靈の働きを大に敬畏せよ。日々聖靈を求めて之を信じ、之に從順し、之に信賴せよ。左すれば聖靈イエスにある凡てのものを取りて之を諸君に知らしめ給ふべく、又諸君のため諸君の中に大にイエスの榮光を輝かし給ふべし。

オー我が父、イエスの父、なる汝より我に贈り給ひし此賜物を感謝し奉る　我は主の靈の殿となりて我が衷に聖靈の宿り給ふことを感謝し奉る

主よ願はくは我を敎へ全心を盡して之を信ぜしめ我が衷に聖靈の宿り給ふことを知れる者の如く此世に生存る道を示し給へ　深重なる敬虔の念を慈父に對するが如き畏敬の念を以て我が衷に在す神に對することを敎へ給へ　主よ我は斯る信仰に由て己を聖くする力あるものなり。

聖靈よ我が衷にある凡の罪惡を示し給へ　聖靈よ我衷に在るイエスの凡を示し給へ　アーメン

一　聖靈の人格を知り、聖靈の働きを知るは、キリストの人格を知り、キリストの働きを知るさ均しく吾人に取りて非常に大切の事なり。

二　聖靈に關しては、吾人特に左の眞理を確信せんことを勢めざるべからず、曰く聖靈はイエスの働きの結果。として吾人に與へらるものなり、又聖靈は吾人に於けるイエスの生命の能力なり、又聖靈によりてイエス自ら其圓滿なる救ひを挑へ、吾人の中に宿り給ふ。

三　吾人若し此の幸福を受けんと欲せば、聖靈を以て滿たされざるべからず、聖靈を以て滿たさるゝことは凡て他のものを虛ふしイエスに滿たさるゝことなり、己れを捨て、十字架を取り、イエスに從ふは即ちイエスの聖靈に滿たさるゝの途なり。否こは寧ろ聖靈吾人を其の盈滿に導びき給ふの途なり。大凡そ如何なる人といへども聖靈に導かれさる以上は充分イエスの死を自ら味ふの力は決して之を有せざるものとす。されど聖靈は主の死を實驗せんとするものを手以て之を導びき、終に其目的の域に達せしめ給ふべし。

四　救の全躰、即ち新生命の全躰は悉く信仰に由ると均しく、聖靈の賜物、聖靈の働きも亦然りとす。信仰によりて我は聖靈を受け我は聖靈に導びかれ、我ば聖靈に滿たさる。決して行ひによるにあらず、決して感情に由るにあらざるなり。

五　キリストのみ我が爲めに成就し、キリストの外誰も成就せしも

のなき事業あることは、我が明了に確實に信仰する所なり。然るに聖靈もまた我が中に働き、我が救のために必要なる凡てを思慮し、成就することを我に全ふせり、吾人は此の聖靈の事業を信ずること、亦前者と均しく明了確實ならざるべからず。

第廿三章　聖靈の嚮導

『凡そ神の靈に導かるゝ者は是れすなはち神の子なり聖靈みづから我儕の靈と偕に我儕が神の子たるを證す』羅八、〇十四、十六。

吾人をして其の小供なるとを確信せしむる聖靈は、また吾人を小供として嚮導す。若し聖靈の導びきなからん乎、吾人は遂に天父を愛慕するに由なかるべきなり。之に反して若し身を以て聖靈の嚮導に一任する人は即ち以て信仰上眞正圓滿の保證を得べきなり。然らば此の嚮導とは果して何ぞや。曰く吾人が內部の秘奧なる生命悉

く聖靈に案内せられ、其の至るべき所に至るをいふ是れ嚮導てふ語の主要の意なり。吾人は堅く之を確信せざるべからず。吾人の生長と增加吾人の發達と進歩は、一として吾人の働きなるはなく、皆是れ聖靈の力なり。故に吾人は只之を聖靈に一任し置けば即ち足る。彼の禽獸草木を見ずや、其の生長し、增大するは、神の之に賦與し給ひたる生命の力によりてなり。今も亦然り、基督信徒はキリストイエスの中にある生命の聖靈によりて發達するなり(イ)。夫れ天父の吾人に賦與し給ひたる聖靈は其の神聖なる智慧と能力を以て吾人の秘奥なる生命を案内し、神の御座近く之を到達せしむ。吾人たるもの、只滿腔の確信を以て勇み喜んで可なり。

(イ) 何十四、七、六、太六、十八、二、可廿、四、六、廿八、路十、二、四、十、二、羅八

次に亦此の嚮導に就て特別なる訓令あり。『聖靈は凡ての眞理を爾曹に敎ふ』吾人聖書を讀む時には、即ち聖靈の降臨を求め、吾人をして眞理を實驗せしめ、神の聖言の主要の力を實驗せしめられんことを乞はざるべからず。聖書は神の言をして生命あり力あるものたらしむ。聖靈は吾人を嚮導して聖語に相應しき生涯に至らしむ(ロ)。

諸君祈禱をなす時に、亦聖靈の嚮導を信ずべし。『聖靈爾の弱きを助く』。聖靈は吾人を嚮導して願はざるべからざるものを願はしむ。聖靈は吾人を嚮導して篤信、忍耐、有力の祈りを爲すべき途に出でしむべし。聖靈は義の大道に吾人を嚮導す。聖靈は神の凡ての聖旨に吾人を嚮導す(ハ)。

(ロ) 約六、〇、六、同廿、十三、十四、六、同十、十、廿、三、〇、哥前、二、十、撒十、二、十四、前、二、〇、十、亞十、二、〇、羅八、廿、六、猶、廿七、

十二、二〇　哥前二十、六〇　十九、彼前二　十一、五〇

太十、十〇　二、八、徒一　〇、九、羅　十、加　四十八、三〇　弗三、一〇、六、十

聖靈は吾人を嚮導して主の爲めに語り、主の爲めに働かしむべし。大凡そ神の子は皆聖靈を有す。又神の子は天父の働を解し、天父の働を行ふ爲め聖靈を必用とす。聖靈なき時は、何人といへども、天父を喜ばし奉り天父に事へ奉ることを得ず。聖靈の嚮導は神の子の幸福なる特權なり、確實なる證左なり、抑も亦神の子の唯一の力なり(ボ)。

さて如何にせば、充分此の嚮導を蒙むることを得るか。之に就て第一に必要なる事は信仰なり。弱年の信徒諸君、諸君は先づ聖靈我が中に在すことを深く且つ活潑に意識し、此の意識を以て其心を滿たすことを勉めざるべからず。聖靈我が中に在り、亦我が爲に在りてふ事に關し、聖書の中なる天父の御言を悉く拜誦し、我は眞に聖靈の殿なりとの確信、全く我

徒十九、羅五、〇　二、一、〇　前三、十、哥十　六、五、後　加五、三、十四、〇

が中に充滿するにまで至らざるべからず、諸君にして萬一此點を解せず、若しくは信ぜずんば、聖靈諸君に語り、又諸君を嚮導せんとするも到底得べからず。諸君乞ふ、神の聖靈諸君に宿ることの永久不變の保證を確信せよ(ヘ)。

第二に必要なることは是れなり。曰く諸君は宜しく己れの心を靜かにし聖靈の聲に耳を傾けざるべからず。聖靈の働くは猶ほ主イエスの働くが如し、『彼は叫ぶことなく聲を上ることなし』。聖靈は低聲に、靜かに、呟く只極めて靜かに神に向ひて其耳を澄ます雲魂のみぞ、能く其聲を聞き、其嚮導を受くるを得る。なれ吾人若し浮世に拘はり、塵事に纏はれ其心遣ひ、其の快樂、其文學、其の政事に煩はさるゝと過度なる時は、聖靈また

代上十九、十二、詩百十二、二、同一百三十六、二、四十二、二哈亞、廿、四、四徒一六、

吾人を嚮導すると能はず、吾人若し神に事ふるにも、尚ほ自己の智慧と力をのみ恃みて、之れに齷齪たる時は、吾人亦聖靈の聲を聞く能はざるなり。能く聖靈の嚮導を受くるものといふは、謙遜以て他の教を受くることを甘んずる微力なる、單純なる人是れなり、諸君願はくは毎朝端座し、亦毎日數回端坐して且ついへ、主イエスよ、我は何をも知らず、我は沈默せん、願はくは聖靈をして我を導かしめ給へと(ト)。

第三に必要なるものは從順なり。能く内部の聲を謹聽し、其我れに語る所を實行せよ。毎日神の御言を以て其心に滿たし、而して聖靈若し神の言の教訓を心に思ひ浮ばせ給ふとあらば身を以て之か實行に任ぜよ。左すれば此上尚ほ、一層の教を受くるを得べし。聖靈の圓滿なる祝福は、

約十四、十五、六、三十、徒二十五、

從順なる人に約束せられたるものぞかし(チ)。

弱年の基督信徒諸君、諸君は聖靈の殿なり、諸君が神の小供として此世を歩み、己れは天父の御旨を喜ばせつゝあるとを自覺するは、職として日々聖靈の嚮導を受くるに是れ由る。諸君乞ふ之を知れ。

貴むべき救主よ此教訓を深く我心に銘し給へ　聖靈我衷に在す　我は如何なる時も何地に至るも主の嚮導なかるべからず　我若し聖靈の教訓を靜に求めざれば聖書を讀むも神の聖聲を聽く能はず　願はくは常に謹愼警戒して聖靈の生徒の如く歩むことを得させ給へ　アーメン

一　我れ何時までも立ちて仰るゝとなく、何時までも守られ、何時までも生長するものなるを如何にして知るとを得るか、是れ吾人の屢〻耳朶に觸るゝ疑問なり。此の疑問たる、是れ聖靈を辱かしむるものなり、即ち聖靈を知らず、また聖靈を信任せざるの徴證なり。又此の疑問は、忍耐の力の秘決を自己に求め、天の案内者たる聖靈に求め奉らざるを自白するものなり。

二　神宇宙を支配し給ふが故に寸時といへども我が呼吸すべき空氣に欠乏を來すとなし。聖靈亦然り、絶えず我が靈魂の奥所に於て、我が生命を維持しつゝあり。聖靈は終天終地決して其の働きを中止せざるべし。

三　吾人一たび聖靈を受けたる以上は、吾人亦一事のなすべきとなし、只其働きを榮るとあるのみ。斷然己が手を歇め、終始全く聖靈に依頼し、聖靈をして自由に働かしむるとあるのみ。

四　聖靈の始め、また終りは、我にイエスを啓示し、我をしてイエスの中に住ましむるにあり。然るを我若し我中なる聖靈の働きを見んとをのみ是れ願ふに至れば、聖靈忽ち其の働きを中止すべし。聖靈をして働かしめんと欲せば、只喜んでイエスをのみ仰ぐべし、然らざれば聖靈は働くとあたはざるなり。

五　天父の御聲善き牧者の御聲、聖靈の御聲は極めて低し。吾人若し其聲を聽かんと欲せば、耳を塞ぎて諸の雜聲を聞かず、浮世の聲を聞かず、朋友の珍談をも聞かず、朋友の思想をも聞かず、己れの自我

なも閉かす、自我の志望なも閉かざらんことを力めざる可からず。左すれば、聖靈の聲、明然として我耳に達すべきなり。吾人をして屢々靜默して祈りを捧げ、聞きして一聲なも發せず、吾人の意思と吾人の思想を悉く主に獻じ、吾人の眼をイエスに注ぎ、耳と胸襟を推し開きて、聖靈の聲を聞き漏らすなからしめよ。

第廿四章　聖靈を憂へしむる勿れ

『神の聖靈をして憂へしむること勿れ爾曹救を得る日の爲めに彼の印を受けし者なり』――弗四〇三十、

神の子の印を受くるは聖靈による。所謂る印を受くるとは、神の所有物として聖別せられ、捺印せられ、記表せらるゝをいふ。此の受印は一旦にして終るが如き死せる外形的の儀式に等しからず。吾人若し、爽なる聖靈の生命によりて之を實驗する時は此の受印は活ける動作として靈魂に大感動を及ぼし、信仰に鞏固なる保證を與べし。此故に吾人は注意

（イ）エペソ五十三、七十五十

に注意を加へ、聖靈をして憂しむるが如きとあるべからず。是諸君が日々神の子たるの喜ばしき左券を握り、亦圓滿なる祝福を得るは、獨り聖靈の力によるを以てなり。誠に吾人を嚮導する所の聖靈は、亦た能く吾人が神の子なるとを證するものぞかし。さて如何にせば、人聖靈を憂へしむるか、他なし、第一に罪に降伏すると是れなり。夫れ聖靈は即ち聖きなり、吾人を潔めんとて與へられたるものなり、キリストの血が洗ひて以て吾人を潔からしむる罪の爲めに與へられたるものなり、神と神の潔き生命を吾人に滿たさんとて與へられたるものなり。然るに吾人にして罪に降伏せんか、其罪は聖靈を憂へしむるや必せり。已に罪は聖靈を憂へしむ(イ)。此故に神は吾人が警戒の上にも尚ほ警戒すべき罪

（ロ）詩五十、箴十二、二、同廿一、廿二、廿三

名を記し、以て吾人の注意を促がし給ふ。乞ふ余をして前掲の題詞と相關係してパウロの列擧せし四の大罪を說かしめよ。

第一は虛僞なり。凡そ聖書の中虛僞ほど惡魔の所爲と看做されたる罪は、また他に是れあるとなし。虛僞は陰府より出でゝ、陰府に入るものなり。神は眞理の神なり。又聖靈は僞を語り、誠實を守らず、眞理に損害を及ぼすが如き男女に其の祝福の働きを及ぼすと能はず。弱年の信徒諸君心を窮めて聖書を讀み、僞言及び僞言者に對する敎訓を仔細に研究せよ。又少しも虛飾なき眞理を語るの外、他を語るとなからん爲め神に祈禱せよ。努神の聖靈をして憂へしむるなかれ(ロ)。

第二は憤怒なり。『凡ての很毒、患憾、忿怒、喧嚷、を去り、謗讟、又諸の惡を去る

八、約十八
四、默廿
一〇、八、
廿七、
廿二、同
五、
太五、廿四
二、十
六、前
七、哥
一〇、同
十一、
三、同
三〇、
十三、加
一、
五〇、五、
同十五、
二十一、
二十六、
四十三、
八、撒前五、
十三、
二、〇、
十五、雅
十、〇、
四、

可し』。性急にして怒り易く、短慮なるは、僞言と共に極めて普通なる罪惡にして、信徒は之が爲めに恩寵に成長するとを妨げられざるとなし(八)。信徒諸君宜しく一切の性急短慮を取り除くべし。是れやがて聖靈を憂へしむるなかれとの命令を奉じたるものなり。諸君願くはイエス聖靈を以て諸君を守るを得るを信じ、己れを捨てゝ聖靈の宿らんとを求めよ。聖靈必ずや諸君を温和にして且つ何時までも温和ならしめ給はん。然り、諸君、乞ふらくは神の力イエスの力、聖靈の力は性急短慮に勝つものなるを信ぜよ(二)。己が短慮の罪を告白せよ、神即ち之を除きて諸君を潔きものとなし給ふべし。神の聖靈をして憂へしむるなかれ。

第三には盜奪なり。盜奪とは我憐人の財産、所有物に對する一切の罪な

太十一、〇哥
廿九、前
九、六、〇十
加、二、十、
一、弗六、〇二、
十、六、
一〇、七、四、
一〇、八、
提後十二、一〇、

路六、〇廿
一、羅十、
三、〇撒前四、〇
六、

り。商賣上詐欺と不正直を逞ふし、之によりて他人を損ひ他人を害して、己れを利せんとする一切の不德なり。キリストの律法は愛なり、人之によりて己れの益を計ると共に亦隣人の益を計らざるべからず。ア、金錢を愛し、財産を愛するは、是れ私利私慾の心より出づ、是れ聖靈の嚮導と相兩立せざるものなり、大凡そ基督信徒としては、徹頭徹尾正直を守り、廉潔にして他人を愛すると、尚ほ己れの如しと公認せらるゝ人ならざるべからず(ホ)。

第四にパウロはいふ、『潔れたる言を出す勿れ、互の德を立べき善事を語る可し』と。抑も神の小供にありては、其舌さへ、主に屬するものなり。されば神の小供は其語法を以て、其の然るを示さゝるべからず。若し其言語

の用法によりては能く聖靈を憂へしもべく、能く聖靈を喜ばしむべし。聖められたる舌は、獨り其隣人の祝福たるのみならず、亦た談者自らの祝福なるぞかし。之れに反して醜談、虚言、悪詛の如きは聖靈を憂へしむ。皆是れ神の愛を以て人の心を潔め、慰め、滿たさんとする聖靈の働きを妨ぐるものなり(へ)。

弱年の信徒諸君、余は敢て諸君に願ふ。以上諸の罪及び其他の罪により て聖靈を憂へしむるとなかれ。若し誤りて是等の罪を犯すとあらば、即ち之を告白せよ、神即ち之を取り除きて諸君を潔きものとなさん。諸君は聖靈によりて捺印せらる。諸君若し堅く此の信仰に居り、信仰の喜びを味はんと欲せば、乞ふ神の言を謹聽せよ、曰く『神の聖靈をして憂へしむる勿れ』

主なる神天に在す父よ　主は我心に主の聖靈を與へ我に顯はし給ふ最大なる恩惠を悟らしめ給はんことを希ひ奉る　願はくは此信仰を以て我凡の罪より我を潔むる權となし給へ　聖なるイエスよ願はくは我を潔め思念にも言語にも行爲にも――凡の事に由て主の像を顯はさしめ給へ　アーメン

一『聖靈をして憂へしむる勿れ』。信徒が此の一語に對する意向如何は蓋し是れ信仰の生涯を解知したりや、否やの試金石なり。

此語は或人に取りては恐怖、戦栗すべき言ならん。曾て一人の父親ありけり、新たに屋ひ入れたる家庭教師と共に其娘を他處に旅行せしむるとて、之を停車場にまで送り行けり。別れに臨みて父親いふやう、『我れ聞く、彼の教師は非常に感情的の婦人にて、氣を廻はし過ぐるの癖ありと。嬢よ注意して教師を憂へしむるが如きとなすなかれ』と。娘は之を聞きて旅行中一擧一動にも心置かれて愉快ならず、何事にも氣を廻はし易き教師に心配させじとて心憂へ、究屈の思をなしたりさぞ。

聖靈に對しても亦斯る考へを抱ける人なか〳〵多し或は之を以て容易に滿足せしむべからざるものとなし、或は之を以て吾人の弱きに頓着せざるものとなし、或は如如ほど自ら勞すればとて、吾人の働完からざる間は到底滿足し給はざるものとなす。誤まれるも亦甚だしからずや。

二

又一人の父親ありけり、暫らく其娘を他郷に旅せしめんとて是れ亦停車場まで見送れり。然るに此の娘の旅伴は前者の心、知れぬ家庭教師なるに反し、平生最も親愛する生みの母親なりける。別れに臨みて父親いふやう『嬢よ、善き小供であれよ、何事をなすにも、母の心を喜ばせよ、然らざれば母も我も共に心を傷むべし』と。娘は喜ばしげに答ふらく『父よ、承はりぬ』と。是れ此娘は母と共にあるとを、いと福のとと考へ、母の心を喜ばすため、あらん限りの力を盡すを本意としたればなり。

或る神の小供は、能く聖靈の柔和親切の愛を解し、其の慰解師また

善き靈なるを知る、されば『聖靈をして愛へしむる勿れ』てふ語を聞くも柔和の聲と聞え、之に由て却て奬勵の力を得、願はくは吾人が聖靈を愛へしめ上との心配をして常に親愛の情より起る柔和なる小供の心配たらしめんとを。

第廿五章　肉と靈

『兄弟よ我さきに爾曹に語れるとき靈に屬る者に語るが如くする能はず唯肉に屬る者の如く亦キリストに居る赤子に語る如くせり』

―哥前三〇一

『我は肉なる者にして罪の下に賣られたり善なる者は我すなはち我肉に居ざるを知るそは願ふ所われに在ども善を行ふことを得ざればなりそは活す靈の法はイエス、キリストに由て罪と死の法より我を釋せばなりもし神の靈なんぢらに住ば爾曹は肉に在で靈に在ん』

―羅七〇十四、十八、同八〇二、九、

『靈に由て始り今肉に由て全ふせらるゝ乎爾曾もし靈に導かるゝときは律法の下に在ざる可し若しわれら靈に由て生なば亦靈に由て行む可し』――加三〇三、同五〇十八、廿五、

人には二種の互に相衝突する性質あり、弱年の基督信徒は之を心得置くと極めて大切なり(イ)。吾人若し前掲の題詞を讀まば此の點に關して神の言の吾人に敎ふる眞理は即ち左の如くなるを見ん。

罪は肉より來るものなり。基督信徒何故に依然罪を犯すかとなれば是れ其の肉に降伏し聖靈に由りて歩まざる爲めなり。信者は皆聖靈を有し、且つ聖靈に由りて生活す。然れども亦信者悉く聖靈により歩むとは限らざるなり。信者若し聖靈に由りて歩みなば、決して肉の慾望に應するが如きことは是れあらじ(ロ)。

信者にして尙ほ鬪爭嫉妬の弊を脫せざる間は、聖書は之を呼んで肉に屬するものといふ。斯くの如き人は善を行ふことを願はざるにあらざるも、尙ほ行ふ能はず、却つて其の願はざる所のことを行ふ。是れ自力によりて勤むるのみにて聖靈の力を恃まざるの致す所なり(ハ)。

肉は未だ律法の治下を脫せず、只管律法に從はんとを是れ求む。されど律法は肉に在りては毫も力なく、善を行はんとするの志望も亦徒勞なり。即ち肉はいふ、『我は肉なる者にして罪の下に賣られたり蓋は我が行ふ所の者は我も是も是とせず』と(ニ)。

されど此の狀態は神が其子に何時までも止まれかしと望み給ふ狀態にはあらず。聖書に曰く『神爾曹の衷に働き爾曹をして志を立て事を行はしめ給ふ』と。（原譯者曰く『和蘭譯の聖書には業を成就せしめ給ふ』との一句あり）。されば信者は宿に聖靈に由りて生活せざるべからざるのみならず、亦聖靈に由りて歩まざるべからず。また靈の人たらざるべからず、亦全然聖靈の嚮導の下に居らざるべからず（ホ）。信者にして若し斯くの如く歩みたらんには亦其願はざるとをなすが如きとあらざるべし。亦羅馬書七章にいふが如き、律法を行はんとを求むる新生の嬰兒の如き境遇にある者ならずして、却て羅馬書第八章に記さるゝ如く聖靈によりて律法の羈絆を脱し、律法に所謂る『これをなせ』との命令は其効

同七、六、同〇　四八、〇三、加五　同〇、六十、八　二、七十、三　來八、〇九、同十八　四羅八、〇哥前十　二、五、〇、同三十　羅七、六、同八、十二、三〇　羅七、〇十、加三

力と失ひ、却て死を齎らすものとなり、堂々儀文の舊樣に超然して、聖靈の新樣に濶歩するものとなるべきなり（ヘ）。

或は信者にして靈を以て初まり、肉を以て終るものあり。成程彼等は既に悔い改め、靈によりて新に生れしものなれども、不知不識只己が力を恃み、あらんほどの能を盡くし、之に由りて卑に克ち、之に由りて聖とならんとするの身とは成り果つるなり。彼等は此の勉强に對して神の御助けあらんとを願ひ、亦これこそ信仰なれと自認す。宜なる哉、彼等は『善なる者は我すなはち我肉に居らず』といふの何事なるやを解せず、隨つて神の聖旨を行ふ爲めには、自力の勉强を廢し、全然一向に聖靈を恃むといふとの何の意たるを解せざるとや（ト）。

○三、同四○九、同五、○四、七、

願はくは神の子よ、よし新たに生れたる者なるにもせよ、『我は肉なる者にして罪の下に賣られたり』と有りの儘に自白するとを勉めよ。以後は己があらん限りの力を盡し、神に祈り、助けを神に恃むとを勉むるを止めよ。然り、而して宜しく『イエス、キリストに在る活す靈の律法は罪と死の律法より我を釋せり』といふべし。諸君日常の業をなすにも聖靈をして諸君の衷に働かしめ、又聖靈によりて歩む可し。左すれば諸君『我が願ふ所の善は之を行ふ能はず』と嘆息するの生涯より救ひ出されて、信仰の生涯に移り、『神爾曹の衷に働き、爾曹をして志を立て事を行はしめ給ふ』といふに應へる身となるべきなり。

主なる神よ願はくは我衷に即ち我肉に宿れるものは悉く善ものなることを賦、心より悟らしめ給へ　己が能力と工夫に由て主に仕へ主を喜ばせ奉ること能はざるを深く感せしめ給へ　聖靈は慰主に在して我等が己の能力なきと憂へ怖るゝことより救ひ我等の衷にキリストの能力を與へ給ふことを知らしめ給へ　アーメン

一　肉と靈との衝突を解せんとすれば、吾人は特に羅馬書第七章と第八章の關係を明了に知悉せんとを勉めざるべからず。羅馬書第七章第六節にパウロは神に奉仕するに二樣の途あるを說く、即ち其一は儀文の舊樣に由りてするとにて、又一は聖靈の新樣に由り

てすると是れなり。又前者に就ては羅馬書七章十四――十六節に、後者に就ては羅馬書八章一――十六に其の詳說あり。尙ほ第七章に於ては靈てふ語を擧ぐるを僅かに一回なるに、律法てふ語は廿餘回に及び、第八章一――十六に於ては、靈てふ語十六回の多きを見る時は、兩者の關係明かなりといふべし。靈魂新たに甦りて新しき性質を具に備はり、律法を實行するの願ひあれど、只如何せん、其力乏しくして、尙ほ『罪の律法に縛がるゝ擒虜』たるを感ずる、是れ羅馬書第七章の記する所なり。然るに羅馬書第八章に於てはパウロは公言して曰く、『イエス、キリストに在る活す靈は、罪と死の律法より我を釋せり』と。之を要するに、羅馬書第七章は信者已に其更生を自覺しながら、尙ほ未だ信仰によりて聖靈の力を實驗せざるの狀態にして、第八章は即ち神の聖靈の眞個に與へ給ふ自由を得て、全く罪の配下を脫せし人の有樣を記したるなり。

こゝ

黑暗と行爲、信仰と自力、聖靈と己れを信ずると等は互に相衝突し、紛々亦紛々、啻に改悔の當時、神の義を受けたる端的に其爭鬪を見るのみならず、已に此の神與の義に由りて歩む者となりての後にも、其爭ひは即ち絕えず、讀者は之を心得置くも極めて大切なり。此故に吾人は信者諸君に望む、若し何事か己れに遇ちあるを發見したる時も、將た又聖き生涯を送らんとする思ひある時にも、已が自力を以て之れに當たらんとするの蒙癖を矯正し、只管イエス、キリストに依賴して、聖靈により神に事ふるに至らんことを。

三　神に事ふるに二の途あり、今之が相違を明かにする爲め最も分明に言顯はされたる聖句を逐條拉に連記する所あらしめよ。讀者願はくは仔細に之を比較し、而して之を充分に會得し得るやう、聖靈を神に祈るべし。亦此の教訓を心に銘して、如何にせば以て神に事ふべき、如何にせば、即ち之に背くかを計量せよ。

必の割禮は靈にありて儀文に非ず（羅二〇廿七）

工なき者も神を信じて義とせられたり（羅四〇五）

なんぢら恩の下にありて律法の下にあらず（羅六〇十四）

今われを繋ぐ者に於て死たれば律法より釋され儀文の舊樣に由らず靈の新樣に由て仕ふ（羅七〇六）

夫れ律法は靈なる者と我儕は知らされど我は肉なる者にして罪の下に賣れたり（羅七〇十四）

夫れ律法の義は肉に從はで靈に從ひて行ふ我儕に成就せんが爲めなり（羅八〇四）

爾曾が受けし靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ず子たる者の靈なり（羅八〇十五）

律法に由れる義は之を行ふ者之に由りて生べしと言へるなり然れど信仰に由れる義は爾心に誰か天に昇らんと云ふこと勿れ又誰か陰府に下らんと言ふこと勿れ然ば何と言ふぞ道は爾に近く爾の口にあり爾の心にありと（羅八〇五——八）

もし恩に由らば功には由らざるなり（羅十一〇六）

我爾曾に語れる時靈に屬る者に語るが如くする能はず肉に屬

る者の如く亦キリストに在る赤子に譬るが如くせり(哥前三〇一)

既に我生けるに非ずキリスト我に在りて生けるなり(加二〇二十)

義人は信仰に由りて生く可しそれ律法は信仰に由らず即ち曰く之を行ふ者は之に由りて生く可しと(加三〇十一、十二)

嗣業と爲ること若し律法に由ば約束には由らざる可し(可三〇十八)

見救に爾はもはや僕に非ず子なり(加四〇七)

此の如くなれば我儕は婢の子に非ず自主の婦の子なり(加四〇三十一)

靈に由りて行む可し然ば肉の慾を成こと莫らん(加五〇十六)

爾曾若し靈に導かるゝ時は律法の下に非ざる可し(加五〇十八)

神の靈に由りて役事を爲しキリスト、イエスに由りて跨り肉躰に恃まざるなり(腓三〇三)

他の祭司は肉躰に係る律法の例に循ひて立て、朽ざる生命の能に循ひて立てり(來七〇十六)

親愛なる信徒諸君、諸君はイエスとイエスの生命さを身を以て之を顯示し、罪の肉躰の働きを粉碎する爲に主イエスより聖靈を受よ。願はくは多々、益々聖靈に滿たさるべし。聖靈は諸君の中にありて、慰解師たり教師たり、凡てのものは此聖靈より直ちに諸君に達す、諸君之を喜び信ト生活せよ。諸君亦左の聖句を暗記し之を

味ひ之を唱へて生活せよ、曰く『我儕は割禮を受けたれば神の靈に由りて役事をなしキリスト、イエスに由りて誇り、肉躰に恃まざるなり』

第廿六章　信仰の生涯

『義き者は信仰に由りて活くべし』―哈二〇四

『律法より釋され義文の舊樣に由らず靈の新樣に由りて事ふ』―羅七〇六

『既やわれ生るに非ずキリスト我に在て生るなり今われ肉躰に在て生るは我を愛して我が爲に己を捨し者すなはち神の子を信ずるに由て生るなり』―加二〇二十

右に掲げたる哈巴谷の言は獨り信仰を以てしてキリストに救はるゝ

羅一、七、十　一〇、三、加一、十　來八、十、〇、三

羅七、五　一、七、二同、十　二、一同、十　約二、二、加十　二、一、五、二、〇　十、〇、六、二、十

の神勅として新約書中三たび引用せられたり(イ)。されど此言は往々にして頗る不充分に亦皮相的に解釋せられ、只悔改の際、信仰によりて義とせらるゝとなりと速了せらる。成程此言には此の意義も亦籠れり、されど尙ほ是れよりも深き意義ありて存すと知らずや。所謂る『義き者は信仰に由て活くべし』とは、義人の生涯は其始終を通じ、時々刻々信仰に由て活くるとなり(ロ)。

信仰に由りて來る恩寵と、行爲を要求する律法との間には截然たる區別あると神が其の聖語に說示し給ふ所、是れ吾人の知る所なり。是れ稱義に關して一般に認許せらるゝところなれども、又此の區別は成聖の生涯に就ても即ち同じく然ることとなりとす。義人は只信仰に由りて活くべし、所謂活くべしとは、神の聖意に應ふ生涯を送るの力あるべしとなり。而して其悔改するや、己れは何の善なる所もなしと心得、己れは微力不信のものにて恩寵を受けざるべからざるものと心得るを必要とせしなるべく、隨つて亦信徒としても、己れに何の善なる所もなく、時々刻々に上より力を受けざるべからざるものと心得ると大切なり(ハ)。此故に其行ひも亦皇天上帝を仰ぎ視て、干且干夕に其力を信じ、又其力を受けざるべからず。我は我が力を盡して事をなさんとするも不可なり、又主の力を與へ給はんことを望むも不可なり。然り、我は死せるもの、我は眞實何事をも行ふ能はざるもの、我が生命は上なる主にあるものなれば、只信仰に由りて、主に依賴し勢强く我が中に働かせ給ふに一任し

羅七、八　一〇、二、同　三、二、十　八、〇、來　廿、十、八

羅七、四〇十
一〇九、西一〇九哥後、
二廿、同〇三

て可なり(ニ)。

信徒の日々の大危險は、再び律法の下に復歸し、己が力もて血肉により神に事ふるを喜ぶにありと覺悟せる者は福なるかな。我は律法の要求の下にある者ならで、肉によりては力なけれども今は恩惠の下にあるが故に、與へらるゝ儘に受くる身分なるを知れる人は福なるかな。キリストにある凡てを我に傳遞する聖靈の約束を充分に我ものとせる人は福なるかな。信仰に由りて活くるとは何の意なりや、儀文の舊樣に由らず聖靈の新樣に由りて神に事ふるとは何の意なりや、之を心得たる人は福なるかな(ホ)。

ホ羅七、四〇
十四、七
二六同〇
五五、〇六、加〇
八、三、誹三十

願くはパウロの言をして(我キリストと偕に十字架に釘けられたれども我猶生くる……)吾人の言たらしめよ。眞正なる信仰の生涯とは寔に斯、る狀態をいふ。我肉然り我罪のみならず、我肉は是れ我生活、我が希望、我が力量、我が行爲と共に悉く其生命を絶ち了れり。最早我れ活けるにあらず、然り、我は活きんとするも能はざるなり。我は活くるとをせじ、亦何事をもなさじ(ヘ)。キリスト我にありて活き給ふ。キリスト其聖靈に由りて我が力たり、亦我が正しき生涯を送るに就て教訓と助力を與ふ。今我が肉にありて活くる生活は、我は信仰により、キリストによりて活く。キリストにありて働き、キリストにありて希望し、キリストにありて成就する樣、キリストに一任し奉るは、是れ我がなすべきの大事業なり。」

ヘ約十五〇
四五、哥
十五、〇
前十五、哥後
十二、〇
十、

弱年の信徒諸君願はくは此の信仰の生涯を送るとを諸君の信仰たら

しめよ。

オ　我主なるイエスよ主は我生命なり然り我生命なり　主は我衷に住み我全生を主の御手に保ち給ふ　我日々の生涯は我衷に主の働給ふことを喜び信ずることゝ之を實驗するにあらんことを　貴むべき主よ此信仰の生命に服從し奉る　然り我は己を主に委ね奉る願はくは主御自身を我に敎へ示し給はんことを　アーメン

一　『主若し助け給はゞ』といひ、『主我を助け給はざるべからず』といふ、其共に誤認たるは諸君之を了解せられたりき。尤も吾人日常の事に關しては斯くいふと必ずしも不可なりとせず、是れ蓋し吾人は多少の力を有し、而して主も亦之を增し給べければなり。されど靈魂に於ける神の恩寵に關しては新約書中絕にて『助け』てふ語の用ゐられたるとなし。吾人は絕對に力なきもの、吾人弱きが故に神吾人を助け給ふにあらざるなり。然り、神は全く吾人を無力無能のものとして其生命と其力を與へ給はんとするなり。若し夫れ此の義を認なく考ふる人は庶幾くは唯信仰によりて活くるを得ん。

二　『信仰なくば神を悅ばすこと能はず』『凡そ信仰に由りてせざる者は罪なり』とは、是れ皆神の聖靈の吾人に語る所、吾人の生涯の一言一行は悉く信仰に滿されざるべからざるを敎へざるはなし。

三　此故に吾人は日々イエスに於ける我が信仰を練磨して吾人の

生命となし、且イエス我が裏に宿り給ひて我に代り、又我によりて萬事をなし給ふを信ずるを之を第一の事業とせざるべからず。吾人はイエスと交親しイエスに近接するにあらざれば、眞の信仰即ち維持すべからず。

四

此の信仰はイエスと我れと互に己れを捨つるによりて初めて其の効力あり。イエス先づ己れを捨てゝ全く之を吾人に賜ふ、されば信者亦イエスを我が有となし、イエスの案内を受くる爲めに全く己れを主に献ぐべし。斯くてこそ靈魂初めて主の萬事を爲し給ふに一點の疑なだも挾む能はざるに至るべけれ。

第廿七章　悪魔の力

『シモンよシモンよサタン爾等を索て麥の如く篩はんとす然れども爾の信仰絶さるやう爾の爲に祈れり爾歸へん時その兄弟を堅せよ』―路廿二〇廿一、廿二

敵の敵たると現はれず、若しくは敵の敵たるを忘るゝほど危險なる敵あるとなし。基督信徒の敵、三あり、世と肉と悪魔と即ち是れなり。中に就て悪魔最も危險なり。是れ蓋し悪魔は其持てる力を世と肉とに貸すのみならず、其の肉眼に見へざるため人殆んど之を知らず之を怖れざる

に由る。惡魔は暗黑の力を具ふ、故に能く人の眼を晦まし、人をして己れを知る能はざらしむ。惡魔は己れを圍むに暗黑を以てし人をして己れを窺ふ能はざらしむ。加之、惡魔は光明の天使に扮つの力をさへ具ふ(イ)。されば基督信徒が惡魔を知らんと欲し、聖書に顯示せられたる所を究めんとすることは、即ち見へざるものを認むる信仰に由りてなりとす。

イ　太四〇　六、哥後四、四〇　同十四、一〇

主イエスの此世に居給ふや、其重要なる御業は惡魔に打勝つことなりき。其のバプテスマを受けて聖靈に滿たされ給ふや、此の聖靈の盈滿イエスを導びき、魔界の首領なる惡魔に觸接し、之と戰を交へ、之と雌雄を決せしめぬ(ロ)。主の眼は是れより以後、サタンの力と其の所爲とを看漏

ロ　太四、一、十、〇

らしたるとあるとなく、罪惡悲哀の中に、由々しき大敵たる惡魔の强國の默示を發見せり。啻に惡鬼病のみに限らず、普通の疾病も神と人の敵なるを見たり(ハ)。吾人はペテロの主に勸て十字架を避けしめんとし或は三たび主を識らずと言ひしが如き、只之をペテロの天性の然らしむる所なりと思へども、主は其の惡魔の所爲なるを看破し給へり(ニ)。吾人はイエスの苦痛を見て之を人類の罪惡、神の允許とのみ思へどもイエスは其の暗黑の力なるを洞見し給へり。キリストは生死共に唯惡魔の行爲を撲滅するを畢生の大事と爲し給ひしが故に、其の再臨の時にはサタンを粉碎し盡さずんば止まざるべし(ホ)。

ハ　太十二、二〇　廿八、四　可十一、十、〇　路十、廿八、徒十、六、廿八、三、五、〇　路十、三、三、〇

ニ　太十六、二三、〇　路廿二、二一、二、三、十一、十二、〇

ホ　路十、二八、〇　同十、廿三、二、三、十、五、約十二、〇

主がペテロに語り給ひし言と、其の御實驗とを比較し見れば、吾人、其の

悪魔を看破し給ふ御眼力に敬服せざるを得ず。イエスは『サタン熱く汝を索む』と。後ち亦ペテロいへるとあり、曰く『爾曹の敵なる悪魔、吼る獅子の如く徧行て呑むべき者を尋ぬ』と(ヘ)。悪魔固とより無限の力あるにあらず、されどあらゆる弱點、あらゆる虚隙に乘じて之を衝かんとする熱心なり。『サタン麥の如く篩はん』、一語能く悪魔の所爲を描き盡せりといふべし。眞に此世は悪魔の禾場なり、否此の世のみならずキリストの教會すら亦然り、穀は神の屬にして糠は悪魔の屬なり。悪魔は篩ふて曾て休む時あらず、而して其糠と共に漏れて落ちたるものを忽ち己が有となさんとす。若し夫れ此の恐るべき有様にて篩ひ落され、主の仲保によらざる以上は滅亡に至らざるべからざるもの、信者の中

哥前五〇、五提前一一、〇二

太四、九同十〇、三二十、二提前九、六〇、十提後四十〇

にも其數夥し(ト)。悪魔の有する篩は一にあらず、その第一は總じて世俗的の思ひなり、即ち此世に愛着するとなり。多くの人々、貧賤の時には、信仰篤けれども、一朝富貴の身となる時は、忽ち此世の榮利を得んとして汲々す。又或は悔改、入宗の時には甚だ熱心なるが如くに見へて世の煩ひの爲めに迷路に立ち還る信者も亦是れあり(チ)。

第二の篩は私慾なり、利己なり。人若し己れを捨てゝ專心一意、主と隣人とに事ふることをせず、又主にありて隣人を愛せざる時は主の弟子たるの特徴、滅失しつゝあるものといふべし。されば、口に神に事ふることを畢生の勤めとすべしと公言する人も一たび此點に蹉跌すれば糠と

等しく看做されざるを得ず。之を要するに、愛なきとは惡魔の力の紛ひなき徵證なり(リ)。

（約十四、八〇四　豈十、三〇約十五、同四〇二）

第三の篩は自信にして甚だ危險のものとす。人、聖靈に從順すといふに肅口して己が心の思ひに聽從するとなしとせず。或は主の爲めに熱心なる人も、其熱心は即ち肉に屬る熱心にして神の羔の温順全く欠けたるとあり。肉の運動は眼に見へずして聖靈の働きに侵入し、我れ惡魔を征服しつゝありと自負しながら、實は惡魔の術中に陷ゐるものも亦是れあり(ヌ)。

（加三、三〇　同五、三〇十三）

神はサタンに許して其禾場を此世に設るを許し給ふ、否此世のみならず亦教會にすら之を設くるを許し給ふ。此世の生涯豈又危險ならずとせんや。アヽ身を處するに謙遜を以てし、戰々競々己れの恃むに足らざるを認むる人は福なるかな。吾人の恃むべきは、惡魔に勝ち給ふキリストの伸保と嚮導と是れあるのみ(ル)。吾人は惡魔の眞相を知り盡し、能く惡魔の詭計に當るを得べしなどゝ思ふとあるべからず。惡魔は有形界に働き、有形界に力を具ふるが如く、精神界、無形界にも此働きを逞ふし、此の力を具ふ。果して然らば、吾人、有形界に於て惡魔を知り惡魔に克ちたりとも、亦精神界に敗を取らざるやう油斷するとなかれ。願はくは我薄弱無能を確信し、確かに我を謙遜ならしめ給ふ主に依賴せよ。惡魔に對しては之れに優れる金城鐵壁はあらざるなり。

（弗六、〇十、十二、十六）

主なるイエスよ願はくは我等の眼を開き給ふて我等の敵と其詭計を知らしめ給へ、願はくは悪魔と悪魔の領分を知らしめ凡て彼に属るものを恐れしめ給へ　我等の眼を開き給ふて如何に主は悪魔に打勝給ひしか我等も主に在る時は如何に強くして悪魔に打勝るゝことなきかを見せしめ給へ　オー願はくは主に居る道を教へ肉に属る慾望と自愛の念を制し己が弱きに於て強くなる道を示し給へ　願はくは亦悪魔の強敵と信仰の戰を交ゆる時直ちに主に祈り求むべきことを教へ給へ、蓋主は必ず悪魔を我等の足の下に蹈砕き給ふことを知ればなり　アーメン

一　悪魔の存在を知るには、吾人に何等の慰藉を與ふべきか。

曰く吾人は之に由りて卵の外より入り來りて吾人の性質を侵したるにて吾人の天性之を有するにあらざるを知れり。且つ夫れ吾人は主イエスによりてサタンの全たく制服せられ、吾人にして信仰以てキリストに居る時は、サタンまた如何ともするの力なきこを知れり。

二　世此は驕つて其中にあるものと共にサタンの配下にあり、此を以て、其表面は善美の觀あるものさ雖、吾人に危險ならざるもの一もなし。吾人若し萬事に於てサタンの權下を脱し、たゞひ外見上合當正義と見ゆるとにしも、又悪魔の干渉を受けさちんとせば、聖靈に導かれ、聖靈に潔められざるべかちず。

三　サタンは惡しき靈なり、吾人之に抵抗を試みんとすれば、獨り善き靈を以てするあるのみ、神の靈を以てするあるのみ。惡魔は無形界に運動す。吾人惡魔と戰はんとすれば祈禱によりて無形界に入らざるべからず。惡魔は力强き王なり、吾人は惡魔よりも强き者の名に由り且つ之れと交はりて即ち初めて惡魔に勝つべきのみ。

四　靈魂のため、迷へる者の爲め、酒に醉へる者の爲め、異邦人のために働き、之をサタンの權より離れしめんとする事業は、誠に榮譽ある事業といふべし。（徒廿六一〇十八）

五　默示錄によるに羔の血は惡魔を征服し盡せり。（默十二一〇十一）。吾人も亦誘惑に力なきも、之を實驗に徵して知る。見よ惡魔は吾人の血に訴ふるを見れば倉皇として遁逃するにあらずや。卑は全く消滅し、吾人亦全く其權下を脫したるは即ち血によると、是れ吾人の知る所なり。

第廿八章　信徒の衝突

『窄き門に入ためにに力を盡せ』―路十三〇廿四

『信仰の善き戰をたゝかふ可し』―提前六〇十二

『われ既に善き戰をたゝかひ既に馳るべき途程を盡し既に信仰の道を守れり』―提後四〇七、

前掲の聖語は、二重の衝突を説示するものなり。其第一は未信者に對する者にして『窄き門に入ためにに力を盡せ』といふ。門に入とは瞬間の動作なれば、生涯門に入るため力を盡すものはあるとなし、即ち罪人たるもの、直ちに力を盡し、直ちに之を行ふべきのみ。何ものにも其進行を妨げられず、直ちに其門内に進入すべきのみ(イ)。

創十九〇、二十二、〇　約九、十、〇　哥後六〇二、四、〇　來六、七、

其第二は生涯の衝突なり。余已に窄き門を入りて新しき途に出でたり。此の新しき途には常に幾多の敵ありて存す。パウロ此の生涯の衝突に就て曰く、『我は既に善き戰をたゝかひ、既に馳るべき途程を盡し既に信仰の道を守れり』と又此の間斷なき衝突に就て忠告を與へて曰く、『信仰の善き戰をたゝかふ可し』と。

此の二重の衝突に就ては甚だしき誤解あり。人々多くは終身主に逆らひ、又其召を肯んせず、而して其心に平和なく、徒らに内部の衝突を感ずるが故に即ち之を基督教徒の衝突なりと速了す。是れ極めて然らず。是

（ロ）徒五〇三　十九、哥十　前十二、〇二

れ萬事を打ち捨て己れを主に献ぐるを欲せざる人と神との衝突なり（ロ）。是れ主の望ませ給ふ衝突にはあらず。主の宣ふ所は門に入るに方りての衝突にて多年に渉るの衝突にはあらず。然り、主は諸君が其進路を遮る敵に一撃を加へ、直ちに門に入らんとを望ませ給ふなり。

（ハ）弗六〇十　六、約壹

之に次で第二の衝突あり。こは生涯に渉るの衝突なり。パウロは此の衝突を呼んで信仰の戰といふもの兩度に及べり。此の衝突の特徴は即ち信仰なり。若し夫れ戰勝の要素は信仰にあるを知り之に相應しき行をなす人は、必ず勝を得るに相違なし。パウロが信徒たる戰士に對し『信仰の盾を取る可し此の盾を以て悉く惡魔の火箭を滅すことを得ん』と言ひしは蓋し此の謂なり（ハ）。

三〇四、五、

詩十八〇　同四六　十六、同六〇

さて『信仰の戰』とは何の意味なりや。我力を盡す間に、主我を助け給ふべきを信ずるとなるか。是れ屢々世人の考ふる所なれども即ち謬謬の見と言はざるべからず。

大凡そ衝突に於て大切なるとは敵の陷るゝ能はざる城廓堡塞に立て籠るにあり。若し斯る堅城にある時は、弱兵尚ほ能く強敵に抵抗するを得可し。吾人が今日基督教徒としての衝突は最早堡塞に立て籠るとには關係なし。然り吾人は已に其城中に入り今現に其處にあるものなり。吾人其中に居る間は百萬の敵來るも失敗するとなし。所謂る城廓といひ、堅塞といふは、キリスト即ち是れなり（二）。吾人は信仰に由りてキリストにあり、吾人は信仰に由りて敵の一歩だも我堡塞に向ひて進む能は

十二、二〇
六、三、
八、七、
四、同
四、百
二、四
〇、六
二、
十、
十、
二、弗
十、
六、

出十四、四十五、三、〇、代〇約三羅三書十下十十十八、
十代下廿四、二七、〇
三〇、六、五廿、

ざるを知る。惡魔は吾人を堡塞の外に誘き出し、平野に於て吾人を鬪はんとす、是れ其の詭計なり。而して平野に出づれば、勝敗の數已に定まる。されど吾人若し信仰に由りて戰ひ、信仰に由りてキリストに居らば、勝は吾人にあり、是れサタンはキリストと戰はさるべからず、而してキリストにして之と鬪はゝ必ず勝ち給ふを以てなり(ホ)。『我儕をして世に勝たしむる者は信なり』。果して然らば、吾人が第一の大事業は信ずるにあり、是れ亦パウロがキリストの武具を記述するに先ち、『主及び其大なる能らに頼て剛健なる可し』と云ひし所以なり。

何故に勝利は只信仰によりて得らるゝか、何故に信仰の戰は善き戰なる乎、其理由如何といふに、他なし、勝利を購ひ給ひしは即ち主イエスにして隨つて亦敵に克つの力を與ふるものも、只主イエスのみなるを以てなり。吾人若しキリストに在り、キリストに居らば、而して亦己れを捨てゝキリストに住し、信仰に由りてキリストを我有とせば、勝利は自ら吾人の有なり。吾人此に於てか、『戰は汝の戰に非ず、エホバの戰なり、エホバ汝らの爲に戰ひ給はん、汝らは靜りて居る可し』との意を了すべきなり。吾人は神と反對の地位に居る時は、自ら一善だも爲すと能はず、されどキリストに居る時は神の聖旨を喜ばすを得べく、而して亦サタンと相對抗するとを得べし。是れ吾人に手腕ありて然るにあらず、只キリストにあるが故に、能く勝ち得て餘りあるなり。吾人は信仰に由り、キリストにありて神の前に義人たり。之と等しく吾人はキリストにありて

敵に對して強し(へ)。

吾人舊約聖書の凡ての壯麗なる章句を讀み、特に詩篇の中に神が其民の味方となり給ふとを記せる條を讀み且つ其意を會得せんと欲せば宜しく右の心得を以て之を讀め。恐懼の如き、失神の如き、半信半疑の如きは皆意氣を沮喪して敵に勝つ能はざらしむ。之に反して活ける神に於ける信仰は、何事に對しても勇氣あるとを得せしむ(ト)。若し失れキリストにある時は、更に一層然りとす。神は吾人に近づき給へり。神の力は信ずるものゝ裏に働く。吾人に代りて戰ふものは、實は神なり。

オ主なるイエス、エホバの軍勢の長、勇士、勝利者なる君よ我城塞なる主と主の能力に在て強くなる道を敎へ給へ　信仰の善き戰ひとは如何なるものにて又之を戰ふ時我になくてならぬ唯一のものは常に信仰の嚮導者なる主を見上ぐるにあるとを知らしめ給へ　又之をして我裏にありて此世に打勝つ勝利即ち我信仰とならしめ給へ　アーメン

一　信仰の戰は一國兩派に分れて互に鎬を削る內亂にはあらず。却て是れ謀叛なり。此の戰は多くの信徒と知るところ、良心の不安、善を行はんことを欲して徒らに若悶し決して之を成就する能はざるが如き即ち是れなり、キリスト信徒は已れに克つの力あるものにあ

らず、されど若し己れを捨てゝ主に獻ぐる時は、主即ち之を爲し給ふべし。此に於てか、吾人は惡魔の羈絆を脱し、主の敵と其王國の敵に克つの力を得べきなり。されど吾人若し神は神のみ、我は我なりといふに至らば、是れ即ち神に反抗するものなり。是れ亦戰たるに相違なしと雖信仰の善き戰にあらず。

二　加拉太書五章に心の戰ひを論じたり、是れ加拉太人は、未だ全く己れを捨てゝ聖靈に、獻げず、聖靈の導びく儘に歩まざりしに由る。ランゲ曰く、『前後の關係より考ふるに、肉と聖靈の爭ひは決して無際限にはあらず、信者は早晩己れを捨て、只一個の主義即ち聖靈に導かれ、而して後ち更に肉に服從することを厭ふの日來るべきを知る』と。信者は肉に勝たんとて之と爭ふが如きとあるべからず、是れ其力の及ぶ所にあらざればなり。信者の爲すべき所は其適歸服從する所を定むるにあり。信仰に由りて己れをキリストに獻げ而して亦聖靈に由りキリストにありて戰はゞ即ち以て敵に克つの力を得べきなり。

三　此故に吾人が新生命の初歩を論ずるに當りて觀きたる如く、吾人の一の事業は日々朝より夕に至るまで信ずると是れなり。凡ての祝福と凡ての力とは信仰に由りて來る、惡魔を制服する勝利も亦然り。

第廿九章　福祉の基となる可し

『汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さんその地に至れ我汝を大なる國民となし汝を祝み汝の名を大ならしめん汝は福祉の基となる可し』――創十二〇一、二、

右は神のアブラハムに語り給ひたる最初の言なり。而して此言は、神のアブラハム及び其裔たる吾人に對して語らざるべからざる勅諚の要旨を盡くせり。吾人は此言に由りて神の吾人を召し給ふ目的地の何れなるかを知り、吾人を導びきて其目的地に至らしむる力の何なるかを知り、何處に其の力を發見するを得るかを知る。

『福祉の基となる可し』是れ神がアブラハムを世より分ち、亦信仰ある神の小供を悉く世より分ち、給ふ目的なり。

太五〇三　十四、十五、同　十八〇八、同十三、十八〇　羅五十八、十一、十三、前十八〇

神の吾人を祝福するや、必ずしも吾人をのみ幸福ならしめん爲めのみにはあらず、吾人が猶ほ進んで其祝福を他に傳へしめん爲めなり。是れ神がアブラハム及び吾人の解知せんことを望ませ給ひし所なるべし

(イ)。神は其自躰即ち愛なり、故に亦祝福す。愛は己れの幸福を求めず、故に神の愛一たび吾人に來れば其愛即ち吾人に由りて之を他人に及ぼさんとを求む(ロ)。弱年の信徒諸君、諸君は他人に福祉を及ぼすべき神の豫算により、其の恩寵を受けしものなることを初めより了知せざるべから

五、約壹　四、〇十　一、

詩百十二　〇歳五、九、　廿四十一、〇　五廿太、〇廿四　十五、〇哥五前　十八、〇哥〇　後九、九　六、〇來六　〇十　路廿四　四十七、〇九、〇　約十三　十八同十　二十四、〇十

ず。果して然らば、主の諸君に與へ給ひしものを己れ獨り專有して之を他人に分たざるが如きとあるとなかれ。宜しく斷然として全く己れを主に献げ他人のため、主の己れを用ゐ給ふに一任せよ。是れ併しながら亦諸君自ら溢るゝ祝福を蒙るの途なり(八)。

他人に福祉を及ぼすの力は神之を授け給はん。主宣はく『汝福祉の基となる可し』と、又曰く『我汝を祝ゆ』と。諸君は身自から祝福せられざるべからず、身自から聖靈と平和と神の力に潔められ、且滿たされざるべからず。斯くてこそ諸君は他人を祝福するの力をも有すべけれ(二)。神はキリストに由りて『凡そ靈につける賜物を以て我儕に祝み給へり』。願はくはイエスをして此の祝福を諸君に滿たさしめよ。然らば諸君必ずや福祉の基たるべく、疑ひもなく、恐れもなきを得べし、神の祝福は其中に生命の力ありて、能く蕃殖し、能く膨脹し、能く交通す。諸君乞ふ、聖書を見て祝福と増加の雨々幷び行はるゝを知れ(ホ)。凡そ吾人の受くる祝福は其中常に他人を祝福すべき力を含有す。諸君『我汝を祝ゆ』てふ全能なる神の言に時間を貸し、以て之を其の精神に銘せよ。又神自ら『我汝を祝ゆ』といひ給ふべき日を待てよ。又諸君の信仰をして堅く此の約束に取り縋らしめよ。左すれば神必ず諸君の願ふ所、思ふ所に勝りて其約束を事實となし給ふべし(ヘ)。

創一、廿八、〇廿　二、九、同廿　一、〇、同廿　七、十、同廿　六、〇、二　四、

哥後九、〇　八、十一、〇　弗一、〇　三、來六、十四

されど諸君は此の目的を達するために、自ら己れを祝福の地に置かざるべからず。言を換へていへば約束の地に置かざるべからず、即ち約束

路十八、廿九、三〇、二十、約十三、廿、四、廿五、奇後六、七、十〇、八十

を信ずる單純の身分とならさるべからず、主曰く、『汝の國を出で汝の父、の家を離れて』と。吾人が其先祖たるアダム傳來の本性と肉とを辭して之を離るゝとは、神の望ませ給ふ所なり。人類に取りて最も貴重のものを献ぐるとは、神の祝福を蒙るべき途なり(ト)。主曰く、『我が汝に示さん其地に至れ』と。言を換へて之をいへば、新生涯より舊生涯に至るには、我れ獨り汝の案内者なりとなり。所謂る新生涯とは神獨り我を全領するの生涯なり、我神の約束によりてのみ歩むの生涯なり、即ち信仰の生涯なり。

信徒諸君、神は『我汝を祝まん』との約束を其獨得の方法もて諸君に成就し給ふべし。アヽ願はくは諸君、自ら其國を出で其父の家を出で、肉と世との交通を捨て新生涯に移れ、聖靈の生涯に移れ、神が諸君を導き給ふべき神と交通するの生涯に遷れ。左すれば諸君は神の祝福を受くるものとなるべし、左すれば諸君の心は自ら打ち開けて『我汝を祝まん』てふ神の言を信ずるの信仰に滿たさるべし。左すれば神諸君に其約束を成就し、諸君を滿たすに其祝福と力を以てし、以て他人の福祉の基たらしめん。世を離れて神と偕に居れ。左すれば『我汝を祝まん』といひ、『汝は福祉の基たるべし』てふ神の權威ある聲を聞くべきなり。

オー我父よ、全く主の民となし給はんが爲めに主の民を導き給ふ約束の地に至る道を教へ給へ　主の恩惠を我衷に滿し給はん爲めには凡

のものを打棄て主に從ひ唯主と共に語り奉る　主よ願はくは『我汝を祝まん』と詔ひし主の御語を神の聖語として我心の衷に活しめ給へ然らば他人の爲めに生涯を送り他人に幸福を與ふる者となるべし

アーメン

一　神は福祉の最大唯一の源泉なり、我れ神の恩惠を有すること多ければ多きほど、亦他人に多くの福祉を與ふるを得。我は福祉を與ふることなきも亦他人のために働き得ざるにあらず。されど實際他人に福祉を與へんとすれば、自ら先づ『我汝を祝まん』との約束を信せざるべからず左すれば『福祉の基たる』こと自から容易がるべし。

二　他人に福祉を及ぼさんとすれば、先づ小規模を以て初むべし。己れ謙りて他人に事へよ。他人を幸福ならしむるに力を盡くせ。神の愛、聖靈に由りて我が衷に住み給ふことを信ぜよ。又己れを犧牲として我が周圍の人に福祉と喜樂を與ふることを勉めよ。我が中にある神の愛を聖靈に由りて一層廣く他に施し得るやう神に祈れ。而して之れが爲めに己れを捨てゝ主に事ふる時は、神は我が思ふよりも大なる恩惠を我に與へ給ふべきを確信せよ。

三　然れども此の捨己を遂げんと欲せば、宜しく靜かなる祈禱に其時間を費すべし是れ、神諸君の靈を其有となし得んが爲めなり。是れ諸君に取りては即ち其父の家を離るゝとなり。諸君宜しく人を

離れ以て神と語らふべし。

四　諸君は如何に思はるゝや。アブラハムは全然己が身を神の嚮導の下に置きしとき後悔して止まざりしか。否決して然らざりき。左すれば諸君も亦然かせらるべし。

五　信仰の父、アブラハムの小供等に與へられし凡ての約束と凡ての命令の根源たる言二あり、諸君之を知るや否や。其約束とは即ち『我汝を祝まん』との言なり。又其の命令とは『汝祉福の基たるべし』との言あり。諸君願くは共に之を己がものとして確信せよ。

六　此のアブラハムに對する二の言は、何處に於て成就せられたるか、諸君之を知るや否や。曰く其父の家を離れたる時にあり、――即ち神と交通して歩みし時にあり。

第三十章　個人傳道

『なんぢの救のよろこびを我にかへし自由の靈をあたへて我をたもちたまへ。さらばわれ愆を犯せる者になんぢの途を教へん　罪人はなんぢに歸り來るべし』―詩五十一〇十二、十三、

『われ大になやめりさいひつゝもなほ信ずたり』―詩百十六〇十、

『然れども聖靈なんぢらに臨むに由て後爾曹能力を受ん』―使一〇八、

凡そ贖はれし人は皆主のため證明人たるべき命を受けたるものなり。我は獨り敬神の行ひを以てするのみならず、亦我が個人的勞力を以て我主に事へ、我主を知らしめざるべからず。我が舌と我言とは是れ他と

交通し、他を感化する重もなる手段中の一なり。我れ若し我が唇を主に献ぐるとなくして主の爲めに語るが如きとあらば、是れ献身の半なり。全部にあらず(イ)。

さて個人的傳道は非常に必要のものなり、信者にして常に喜んで説教を聞きながら、尚ほ且つ救ひの道を了知せざるもの宮に百千のみならず。されば主イエスは群衆に説教を説き給ひしと共に又各自の必要に應じて個人に語り給へり(ロ)。聖書を見るに主が己れに爲し給ひし所を他人に語り傳へ、斯くして他の福祉の基となりしもの枚擧に遑あらず。(ハ)。斯くの如き個人的傳道の事業は、教師のみの到底能くする所にあらず。大凡そ贖はれたる人は皆教師に其力を協せざるべからず。贖はれたる人は主の爲めの證明人として此世にあるものなり。然るを若し主を告白するとなく、又主の爲めに働くとなくば、其生命は健全なる發達を全ふすると能はざるべし。

主の證明人たるには實驗的證明人たらざるべからず、『主我を贖ひ給へり、主は亦足下をも贖ひ給ふべし、足下此の贖ひを受くるを欲せざる乎、來れ、余をして足下の案内者たらしめよ』といふの勇氣なかるべからず(ニ)。『足下は既に贖はれたる乎、足下は何に妨害せらるゝ乎、余足下を助けて主に導びくを得ざるか』といふが如き新しき問に遇はゝ喜んで之に應ずるもの素とより百千のみならじ。されば父母としては親しく其子に語り、『我が子よ御身は已に主を受け容れたりや』と問はざるべからず。

イ 詩十、四十、十一、十六、同四十、十六、同七十、十一、同八十、十一、五、廿四、十、三、十五、來十、三、

ロ 路七、四、十、三、約三、四、七、同

ハ 出十、十八、十一、八、代下五、十、

ニ 約一、二、四、十二、十六、四、同四、廿、八、廿九、十、徒十、一、十九、

又日曜學校及び學校の教師としては聖書を教ふる時間に於て小供等の己に救ひを受けたるか將た否らざるかに就て親しく之に問題を提出しせざるべからず、加之彼等各自に對し別々に問を掛くるの機會を求めざるべからず。又朋友としては己が朋友に語らざるべからず。然り、何は措きても、先づ斯る働きを爲さゞるべからず。

個人傳道は愛の働きならざるべからず。諸君願くは他の人々をして其深く彼等を愛するとを感せしめよ。イエスに現はれたりしが如き愛の謙遜と愛の柔和とを亦諸君にも現はれしめよ。何事によらず、機會さへあれば、己れを棄てゝイエスに献げ、以て其愛に滿たされよ。而して諸君が此の働きを全ふするとは、イエスの愛を感ずるとに由るにあらず、實に此愛を信ずるとに由るものなりとす。『愛する者よ自己を守りて神の愛の中に居り疑へる者を憐み或者をば火より取出して救ひ或者をば畏懼を以て憐むべし』。肉は往々にして謂へらく力と勢とは愛と忍耐に勝れる働を爲すを得べしと。是れ極めて然らず、愛は萬事を爲すものなり、愛は十字架上に勝利を得たりと知らずや(ホ)。

個人傳道は信仰の働きならざるべからず、愛に基づける信仰の働きならざるべからず。主我を用ゐんとを望み、又我を用ゐ給ふべしと信ずる信仰の働きならざるべからず。諸君我か弱きが爲めに心に憶するなかれ。聖書を繙きて神が其證明人の爲めに、絶えず授け給ふ約束の如何ばかり光榮なるかを研究せよ(ヘ)。常に己れを捨てゝ神に献げ其の生靈救

*來三〇十三、同十一、廿四、〇、猶廿一、二十三、〇

出四〇十一、十二、

九太〇一〇九書
二十六、四、一
二〇、耶、賽
十、十七、一十一〇

六五九加二六百〇代(ト)
、、〇、廿七下
〇約八五七六、十
十壹〇、基〇詩五

濟の爲めに用ゐ給はんことを求めよ。此の目的の爲めに諸君を贖ひ給ひし神は、又此の目的の爲めに諸君を祝福すべしとの事實を確信せよ。諸君の働きは弱く且つ臆病に又一時祝福を蒙らざるが如くに見ゆるとも決して失望することなかれ。神の定め給ひし日來らば、即ち必ず刈り入るゝを得べきなり(ト)。神の力を信ぜよ、神の諸君に下し給ふべき祝福を信ぜよ、祈禱に答へ給ふとの確實なるを信ぜよ、而して是等の信仰に滿たされよ。『若しその兄弟の死に至らざる罪を犯すを見ば祈りて死に至らざる罪を犯す者に生を與ふ可し』。たとひ如何ほど墮落し、如何ほど怠慢のものにせよ、たとひ謙遜なれども而も己が罪に無頓着なるものなるにもせよ、諸君敢て失望することなかれ、主は強くして能く祝福を與ふるの力あり。主は能く祈禱を聞き給ふ。

終りに個人傳道をなすには、イエスと交通して此の働きを進行せよ。是れ併しながら、最も大切の一點なり。イエスと最も密接して生活せよ、全くイエスの爲に生活せよ、イエスとして諸君の生命の中にあらしめよ、左すればイエスは諸君に語り、又諸君に働き給ふべし(チ)。主の祝福に滿たされよ、主の靈と其愛とに滿たされよ。左すれば諸君自ら福祉の基たらざらんとするも得べからざるべし。又諸君は主の常に我に爲し給ふことを歷々指摘し得るに至るべし。又凡ての生靈に對し、『足下は疚しき所あらざるか、足下は實に主イエスを救主として有するや』との問を仁愛と勇氣と謙遜を以て發し得るに至るべし。斯てこそ主は豐なる福祉

三同三三徒(チ)
、十〇、四
三五哥〇
・〇、後十

を諸君に經驗せしめ、諸君をして生涯他人を祝福せしめ給ふべけれ。弱年の信徒諸君イエスの爲めに證明人となれ。全然己れを献げて主の榮譽の爲めに目を醒まし、主の名譽のために働くものとなれ。是れ余の切望に堪へざる所なり。

恩惠深き主よ主は我をして父に仕へしめ父の愛を宣傳へしめんが爲めに我を贖ひ給へり、我は喜んで此が爲めに己を主に献げ奉る　願はくば此が爲めに主を愛し父を愛し生靈を愛する愛を以て我心を滿し給へ　主の爲し給ひし如く愛より出づる救の働を爲すことの如何計り貴きものなるかを悟らしめ給へ　願はくは主の能力を以て弱き我と共に働き給ふことを確く信ぜしめ給へ　而して生靈を助て主の御許に導き來ることをわが喜樂となすに至らしめ給へ　アーメン

一『我主の爲めに如何なる働きをなすを得るか』、是れ能く人の提出する質問なり。諸君は日曜學校の一級を擔當するを能はざる乎。思ふに諸君は、小供の爲めに日曜學校の設けなき地方に居住せらるゝならん。而して其處には異邦人の小供もあれば、又會堂に行かざる大人も亦是れあるとならん。若し然らば主の名によりて彼等を集むることを試みては如何。而して之を祈禱と信仰の事たらしめよ。諸君初めは疑懼の念に滿されて之を爲すべしと雖、此の事業に着手する時は必ず強くなるべきとを確信せよ。

諸君また書籍及び類書を配布するを能はざる乎。諸君若し己れの益を得たる書籍ありさすれば、其の六部乃至十二部を購入せよ。而して之に就て語り、又之を賣るべし。斯くの如くすれば、大なる働きをなし得るを疑ひなし。亦類書に於ても然がせよ。若し之を施與するたけの資力乏しくば、即ち之を販賣するも可なり。此の方法また福祉の基たるべきなり。殊に其の書中にある事柄を語るを以て初むる時は次第に神の道を說くの便宜を得べきなり

二

然れども最も大切なることは個人的談語なり。諸君談話の技倆あるを感ぜずして敢て躊躇するをなかれ、主は時機至らば、諸君に此の技倆を與へ給ふべし。世には救の道を知らざりしため、滅びに至るもの信じ難きほどに是れ多し。是れ親たり其人に面して如何にせば救はるべきかを明示するをなかりし爲めなり。人多くは其救はるゝに先ちて大變化を求めざるべからずさなし、亦之を感ぜざるべからずさなす、而して此の謬想は其根底極めて深く、如何ほど忠實の說教も、之に對して寸効なきを往々にして然り。而して何事も此の謬想より割り出すが故に、萬事誤解ならざるはなし、事情已に斯くの如しさすれば、親たり其人に會ひ己がありの儘にてイエスを受くべきを、イエスの我を受け給ひしとは確かに知られ得ると、こは新しき生命又聖き生命の力なるを之に語りて能く合點せしむべし

第卅一章　傳道事業

『イエス彼等に曰けるは徧く世界を廻て凡の人に福音を宣傳へよ弟子等徧く福音を宣傳ふ主も亦われらに力を協せ其從ふ所の奇跡をもて道の徴と爲したまへり』――可十六〇十五、二十、

大凡そイエスの友は亦皆傳道の友なり。健全なる心靈的の生命ある人には、又自ら傳道事業を熱愛するの心あり。諸君若し此の理由を考へなば、必す傳道の光榮を知るべく、又靈魂の生命の一部として傳道に從事せざるべからざるを知らん。諸君乞ふ來りて傳道事業は如何ばかり光榮ある、如何ばかり貴重なるものとせざるべからざるかを聽け。

一　是れイエスが天の寶位に代へて取り給ひたる事業なるが故なり。異邦人は天父のイエスに賜ひたるイエスの嗣子なり。サタンの勢力の確立したるは異教の國にあり。而してイエスは勝利者として世に宣傳せられざるべからず。イエスの榮光といひ、天國の降來及び顯現といひ、皆一に傳道事業の上に繫れり(イ)

二　傳道事業は地上の傳道事業の主要の目的なり。主イエスが晩年の教訓は凡て皆之を吾人に教ふ(ロ)。主は教會の首なり、されど其事業をなすとは一に其の身躰に由り其の肢躰に由らざるべからず(ハ)。余果してキリストの肢躰として、又教會の一員として、此の目的を達するために

イ詩八、二〇　太廿八、十　四、同廿　四、十　八、廿八、十　可十、廿三　路廿八、十　一、〇　四、羅十廿　一、〇　五、〇廿　ロ可十六、〇

十五、路廿四〇四十七、約十七〇十八、徒一〇八ヘ哥前十、二〇廿一ニ徒一〇八、同十一〇十二、廿、三廿四、同十三〇二、四同廿二〇廿一、

身を獻げて傳道に從事するを得ざるか。

三　聖靈の與へらるゝは傳道せしめん爲めなり。之を聖靈の約束に就て考へ見よ、亦ペテロとパルナバとサウロに授けられし聖靈の嚮導に就て考へ見よ(ニ)。倩々教會歷史を按ずるに、リバイバルの時は自ら傳道の精神の相伴ふて興起するを見る。聖靈は何時とて天國の膨脹に熱心ならざるとあらざるなり。

四　傳道事業は教會に祝福を來す。傳道事業は勇敢なる信仰の行爲と、勇敢なる克己の行爲を鼓吹するものなり。傳道事業はイエスの驚くべき力の最も光榮ある實例を世に示すものなり。傳道事業は罪人を悔ゐ改めしめて、仁愛祈禱只管傳道の動靜を窺ふ人に天の喜悅を與ふるものなり。傳道事業は人心を潔めて神の大計畫を悟らしめ、又懇願以て神の大計畫の成就する日を待たしむるものなり。傳道事業は教會の生命の證徵にして、又此の生命を多々益々發達せしむるものなり(ホ)。

ホ徒十七〇廿七、同十五〇四五、羅十、一〇廿五卅、三同十五〇十、弗三〇五八十、ヘ黙四十九〇六、十二十八、二十二同五十四〇一二同六十〇

五　傳道事業の世に與ふる祝福果して幾何ぞ。傳道事業にして若し吾人の祖先たる歐洲人に達せざりしならば、吾人の狀態果して如何ぞや。傳道事業は已に或る國々に於て驚くべき祝福を下せしにあらずや。萬一傳道事業あらざりしならば異教國の億兆は將た何に由りて救はるべきや(ヘ)。天國と陰府とは傳道事業を見てサタンの力とイエス、キリストの力の交錯接戰する戰場となすなり。然るに此の戰爭は士氣の振はざる亦甚だし。痛嘆に堪えざるなり。

六　傳道事業を愛する時は、其靈魂に祝福を得べし(ト)。

(1)是れ傳道事業は信仰を鍛錬すればなり。傳道事業は信仰を助くること一方ならず、是れ成功の遲々として人の預想に反すること多きに由る。故に傳道を勤むる時は神と聖書に依頼するの念篤實となるべし。

(2)是れ傳道事業は愛心を鼓舞すればなり。傳道を勤むる時は、己を捨て、己れの小社會を捨て、目を開き心を擴くし、主の爲め上帝の爲めに其利を計るに至るべし。亦傳道を勤むる時は、自ら顧みて眞正の愛の乏しきを感じ更に多くの愛心を授けらるべし。

(3)是れ傳道事業は祈禱に熱心ならしむればなり。傳道を勤むる時は我が中保者としての任務と能力、益々心に分明し、隨つて亦た神の國の爲めに鞠躬盡瘁するの祝福を悟るべし。又傳道を勤むる時は己が快樂と安逸を抛ち、仁愛以て異邦人のためサタンと戰ひを挑むことの迷へるものを救はんとて降臨し給ひしイエスの聖意に倣ふ事なるを悟るべし。

弱年の信徒諸君傳道事業は諸君の想像に越えて光榮なる神聖なる事業なり。諸君の豫期せらるゝよりも此中に多くの祝福ありて存す、諸君の中なる新生命は、傳道事業と相關係あると、諸君の計算の外にあり。諸君願はくは今改めて神の言に從順し諸君の心の大部分を傳道事業に傾注せよ。然り諸君の心なり、他人の心にはあらず。主は必ず、一層深く敎訓を與へ、亦祝福を授け給ふべし。

さて諸君若し傳道事業を主の事業として愛するの熱心は、如何にせば增加せらるべきかを知らんと欲する乎、乞ふ左の諸項に注意せよ。曰く傳道事業に通曉せよ。曰く新聞雜誌及び書籍によりて異邦人の狀態と必要を察し、主の祝福によりて如何なる事業の已に其處に存し又た如何なる事業の目下進行中にあるかを知るとを努めよ。曰く傳道事業に就て他人と會談せよ。或ひは己が近傍に小さき傳道會社を設立するも可なり、或ひは祈禱會の一を撰んで(たとへば一ヶ月に一回)之れを傳道事業のための祈禱會とするも可なり。亦た密室に於て之が爲めに祈れ。天國の降來を諸君が密室の祈禱の一要項とせよ。異邦人に就ての神の約束を諸君の祈禱の材料とせよ。此の約束は聖書中到る所にあり、特に以賽亞書にあり(チ)。又傳道事業の爲めに献金せよ、啻に献金の乞を受けし時のみならず、又た啻に痛痒を及ぼさゝるほどのみならず、其の產業若しくは收益の一部を割いて之れに充てよ。主をして我が傳道事業に熱心なるを照鑒せしめよ。若し己が近傍に於て行はれつゝある傳道事業あらば、己も其の朋友となれよ。若し其の事業にして多く不完全の所ありとするも――人の事業にして何處に果して完全なるものありや――決して其の不完全に不平を訴ふるなかれ。只傳道事業の本旨を考へ主の御言に從順し、祈禱と助力を之れに與たへよ。イエスの友は亦た傳道事業の友なり。傳道事業を愛するは新生命に欠くべからざる要素なり。

(チ)一六、十三、十六、十二　一一、十三、十〇　同二、六、十二　同〇　五、十四　廿二、廿一　八、廿一、十　〇六、廿一、十九

神の子なる主よ主が弟子等の上に聖靈の息を吹き汝等聖靈を受けよと詔ひし時父の我を遣せる如く我汝等を遣はさんと語り給へり　主よ我此所にあり願はくは我をも遣はし給へ　我も主の聖國の爲に力を盡し得んが爲め我にも聖靈を吹き入れ給へ　アーメン

一　『交らざれば愛を生ず』とは傳道事業に適用して殊に適切の金言なり。神が諸方の國々にて爲し給ひし靈くべき事件に通曉する人は傳道事業の成功を見て神を讃美し、且つ感謝すべく、又傳道事業は眞に神の事業なりとの信仰愈堅かるべし。

傳道事業に對する趣味を增さしむる書籍多きが中に、傳道者の傳記の如きも亦其一なり。ヘンリー、マルチンの傳の如きは極めて好し。亦『アンクル、チャールス』と題する一書あり、こは南部亞弗利加の傳道の形勢を記述せるものなり、其他尙ほ多かるべし。

二　吾人の忘るべからざることは、傳道事業は信仰の事業なりといふことこれなり。傳道事業には神の約束を信ず、神の力を信ずる信仰を必要とす。又傳道事業は愛心を必要とす。此の愛心とは、一はイエスに對する愛心にして之によりてイエスの榮光の顯はれんことを望み亦た一は生靈に對する愛心にして、即ち其の安全を庶幾するものなり。傳道事業は『世の受くる能たはざる』神の聖靈の事業なり。此を以て世は只其花々しき成功を見て初めて傳道事業を稱贊

す。信仰にあらずして焉んぞ能くすべけんや。

三　傳道事業の進歩如何ばかり遲々たりさも傳道の友なして決して失望せしむるなかれ。凡ての受洗したる黒人は未だ悔ゐ改めすとも、既に悔ゐ改めしものにして尚ほ舊習を捨てざるものありとも、忠直なる告白をなしたる後、再たび墮落するものありとも、諸君決して失望することなかれ。白人の中にても、決して完全の信者のみにはあらず。昔し歐洲に於ては基督教の輸入に一世紀を消費せり。而して碧國民は一旦之れを受け容れて三四十年の後に亦た之れを放棄せり。其の今日の盛時に達するまでには實に一千年の長日月を要したりしなり。果して然らば、吾人の異邦人に對する亦た一氣に功を斂めんとするなかれ、愛と忍耐と確信と、祈禱と行ひを以てして、且つ神の祝福を乞ひ奉るべし。

第卅二章　光明と喜樂

『よろこびの音をしる民はさいはかなりエホバよ｜かれらはみかほの光のなかをあゆめりかれらは名によりて終日よろこぶ』｜詩八十九〇十五、十六、

『光はたゞしき人のためにまかれ欣喜はこゝろ直きものゝために播れたり』｜詩九十七〇十七

『我は世の光なり我に從ふ者は暗中を行ず生の光を得なり』｜約八〇十二、

『我また汝らを見ん其時なんぢらの心喜ぶ可し其喜樂を奪ふ者あらじ』｜約十六〇廿二、

『憂ふるに似たれども常に喜ぶ』｜哥後七〇十、

父としては其子の喜びを見るを望むと是れ其の常情なり。故に之を幸福ならしむる爲めにはあらん限りの力を盡すを吝まず。神も亦然り、其子の愉快なる思ひを抱きて其前を歩ゆむとを望ませ給ふ。故に神は喜樂を其子に約束し給へり。隨つて必ず喜樂を與へ給ふべし(イ)。神は喜樂を吾人に命令し給へり。吾人即ち之を取り、亦常に此中を歩まずんばあるべからず(ロ)。

此の理由の如何を悟るとは、困難のとにあらず。抑も喜樂は何ものか、眞に我を滿足せしむるか、又我に頗る貴重なるものあるの徵證なり。而し

イ詩八十九、六、十七、約十六、廿二、彼前廿九、十七、十八、
ロ一二、六、九、廿、十、詩三十一、二、〇十、賽五十六、二、〇撒前五、六、〇、腓四十、四、

て喜樂の最も大なるは、我が持てるものを以て、之を他人に推薦すると是れなり。元來神にありて喜ぶといふは、是れ我を滿足せしめ我を飽足せしむるものを我が神にありて有するの一大證據なり。言を換へていへば、我が神に事ふるは之を恐るゝが爲めにあらず、亦守られんが爲めにもあらず、即ち我が救なるが爲めなり。又喜樂は眞理の徵證なり、從順の價値なり、而して我が神の聖旨を喜ぶや否やを示すものなり(八)。此理由なるを以て神にありて喜ぶとは即ち神の聖旨に適ひ信徒自身の信仰を堅くし、且つ其周圍の人に對しては、吾人が神に對する思想を最も雄辯に證明するなり(二)。

聖書に於ては喜樂と光明と往々にして相連結せらる(ホ)。是れ兩者の性

申廿八、四十七、詩四十、九、同百十　一十九、同百十　ホ一帖八、八詩六、十一、四、十八、箴四、〇十八、出十、〇廿、三、母下、廿三、四、詩三、十六、〇十、一賽六、十、二十、一、約四、〇壹五、同四、十六、〇　申廿八、〇、詩四十七、四十、〇

質自ら然るを以てなり。旭日の喜ばしき光は鳥を醒して之を囀ぜしめ又曉を待ち詫ぶる徹夜の番兵を喜ばしむ。今も亦然り、信徒に喜樂を與ふるものは即ち神の聖顏の光なり。苟くも神と交はる人は必ず喜ぶとを得るとにて、又常に喜ぶに相違なし。天父の愛は其子供の上に太陽の如く輝けばなり(ヘ)。之に反して暗黑の靈魂を襲ふは、罪惡か、不信仰か、必ず兩者の一に據るを常とす。罪惡は自躰暗黑にして、又他を暗黑ならしむるものなり。不信も亦然り、吾人をして唯一の光たる神に背かしむるが故に是れより暗黑を生ずるは蓋し自然の理なり。

人往々にして質問すらく、信徒は常に光の中を歩むを得る乎と。之に對する明答は主の言是れなり、曰く『我に從ふ者は暗中を歩まず』と。イエス

を離れて吾人自己の途に立ち還り、以て暗黑を致すは、即ち罪惡の所爲なり。されど吾人此の罪惡を告白し、血に由りて之を潔め了れば、吾人再び光明の中にあるを得べし(ト)。亦不信も同じく暗黑を致す。吾人只己れの私と己れの力をのみ考へ、吾人の感情と吾人の行爲によりて慰藉を得んとす。其暗黑となるも亦宜なる哉。之に反して吾人イエスを望み、吾人に必要なるとは、完全無欠に其中に準備せられたるを思ふ時は、凡ての事皆光ならざるはなきに至らん。イエス曰く『我は光なり。我に從ふ者は暗中を歩ず生の光を得るなり』と。我若し信ずる限りは光明と喜樂長く我と共にあるなり(チ)。

主の聖旨に從ひて歩まんとする諸君、乞ふ主の聖語を聞け曰く『終に我

（ト）七〇十三、賽五〇十八、同五〇十一、九〇二、太十九、五〇十四、哥後六〇十五、八、弗十四、撒五〇前十四、五、約壹二〇、十二、同三十一、六、〇

之を言はん兄弟よ主に在て喜べ常に主に在て喜べ我また言ふなんぢら喜ぶ可し』(リ)。主イエスにある時は、其喜樂は且つ榮光あり。諸君主を信ぜよ、之を信じて喜ぶべし。諸君信仰の生涯を送れ。此生涯即ち救なり、即ち榮光の喜樂なり。大凡そ全然己れを献げて二心なく主に從ひ、主を信じ、主の愛を信じて其生涯を送るものは、必ず光明と喜樂を得べし。此故に靈魂よ唯信ぜよ。敢て喜樂を求むるなかれ、若し喜樂をのみ是れ求むる時は、却て之を得るに由なからん。是れ感情を求むるものなるが爲めなり。諸君宜しくイエスを求めイエスに從ひ、イエスを信ぜよ左すれば喜樂は諸君に加へらるべし。『見ずと雖信じて喜ぶ其快樂は言がたく且つ榮光あり』

（リ）腓三〇一、同四〇四、

主なるイエスよ主は世の光にして近づき能はざる光輝を放ち給ふ
主に由りて我儕神の光を見たてまつる　主の聖顔より神の愛と榮光
の智識の光を我儕の上に輝かせ給ふ　主は我儕の有にして我儕の光
我儕の救濟なり
オー願はくは主と偕にある時は決て暗中を行むことなきことを猶堅
く信ぜしめ給へ　願はくは主にある喜悅をして主は我儕の凡てにし
し主の聖旨を行ふ權能なることを示す證據たらしめ給へ　アーメン

二　何物にもせよ、それに對する我が喜樂は、即ち我が之れに對する評價の尺度なり。人に對する喜樂亦然り、即ち我が其人を喜ぶの尺度なり。事業に對する喜樂亦然り、即ち我が其事業を喜ぶの尺度なり。されば神に於ける喜樂、亦之に事ふるとの喜樂は即ち健全なる靈性的生命の最大確證の一なりさす。

二　喜樂は無智の爲めに妨けらるゝことあり、神を知らず、神の愛を知らず、神に事ふるの祝福を解せざる時の如き是れなり。亦不信の爲めに妨げらるゝとあり、己れの力己れの感情に何ものなか求むる時の如きなり。亦二心の爲めに妨げらるゝことあり、即ちイエスの爲めに萬事を捨て、萬事を抛つを欲せざる時の如き是れなり。

三　讀者諸君乞ふ左の言を了知せられよ、曰く、『喜樂を求むるものは之を得るこゝなく、主と其聖旨を求むるものは求むるに喜樂を得

べし』。諸君能く此の言を咀嚼せられよ。喜樂を感情上の事として之を求むるものは、即ち已れを求むるものにて、幸福を求むるの念胸に滿つるも、遂に之を得るに由なかるべし。之に反して已の私を忘れ、主と其聖旨の中に生活するものは、頓て主にありて學ぶべきを教へらるべきなり。吾人の喜樂は獨り喜樂の神にありて存す。神の外には吾人の喜樂あるとなし。されば諸君、神を求めよ、諸君即ち喜樂を得べきなり。而して之を得るの途、他なし、信仰によりて之を取り、之を享くるのみ。

四　神の性質と其行爲に就て篤く感謝の意を表し、神の御言と其御約束を深く信ずるは、是れ喜樂に居るとの途なりとす。

五　『目の光は心を喜ばしむ』。神は其小供等の暗中を歩むとを少しも其本意とはし給はず。サタンは暗黑の王なり神は光なり、キリストは世界の光なり吾人は光の子なり。乞ふ吾人をして光を歩ましめよ。乞ふ吾人をして左の約束を信ぜしめよ、曰く『エホバは永遠に爾の光とならん、爾の日は再び落す蓋エホバは永久に爾の光となりて爾の悲の日畢る可ればなり』。

第卅三章　懲治

『なんぢの懲めたまふ人なんぢの法をおしへらるゝ人は幸ひなるかなかゝる人をわざはひ日よりのがれしめ平安をあたへ給はん』――詩九十四〇十二、十三

『われ苦しまざる前にはまよひいでぬされど今はわれ聖言をまもる困苦にあひたりしは我によきことなり此によりて我なんぢの律法を學びえたり』――詩百十九〇六十七、七十一

『我儕益を得しめて其聖潔に與らせんかためゑらしむることを爲す』――來十二〇十、

『わが兄弟よ若なんぢら各樣の試誘に遇ば之を喜ぶべき事とすべし蓋なんぢらの受くる信仰の試みは爾曹をして忍耐を生ぜしむると知ばなり』――雅各一〇二、三、

神の小供たるもの、早晩一たびは必ず試煉の學校に入門せざるべからず。是れ聖書の教訓にして、而して亦吾人の實驗の確證する所なり。而して聖書は尚ほ之れに就て更に教ふらく、神若し吾人を導びきて此の學校に入らしめ給ふことあらば吾人は之を以て喜びとせざるべからず。と。吾人が懲治によりて神の教育を受け神の潔めを受くるは是れ蓋し天の福祉の一斑なり。

（イ）賽五〇、三何七、十四〇、十五哥、十七〇

左はいへ、試煉それ自らは福祉を來すにはあらず(イ)。土壤は雨露の滋潤を受け、或は鋤を以て耕されたりとも、之れに種子の蒔かれざる以上は、何等の益もあることなきが如く、神の小供たるものも亦試煉の學校に入門せしのみにては、其の福祉眞に鮮かるべきなり。勿論試煉を受くる時は、一時其の心は軟らぐべしと雖、之れより永久の福祉を得るの途に至りては、到底此の類の人の知る所にはあらざるなり。是れ試煉の學校に入れ給ひし神の目的の那邊に存するかを知らざるの致す所なり。善き學校には必ず四の條件具備するを要す。一定の目的、善良の教科書、適任の教師、從順の學生是れなり。

一　諸君願はくは試煉の目的を明知せよ。聖潔は天父の最高榮光にして

（ロ）賽廿七〇、八九、前十二〇、三十二、來十二、同十〇、二十一、〇十

又子たるものゝ最高榮光なり。『靈の父は我儕に益を得しめて其聖潔に與らせんが爲めに懲らしむることをなす』(ロ)。信徒試煉に遇へば只慰藉を得んと欲す。然らざれば即ち特別なる懲治の下に安泰にして且つ滿足ならんとを求む。是れ懲治に處するの端緒として寔に然るべきことなれども天父の望ませ給ふ所は尚ほ此外にあり尚ほ是れよりも高きものあり。天父は信徒の生涯を通じて聖潔なるが上にも尚ほ聖潔ならしめんとし給ふ。昔しヨブが『エホバのみ名を讃むべきかな』と言ひし時には尚ほ其學校の初級にありし時なり。主は尚ほ之れに多く教を垂るべき點ありたるなり。神は吾人の意思と己が聖き意思とを一躰ならしめんことを望み給ふ、而して其の之れを望み給ふは只懲治しつゝ

ある點に於てのみならず、凡ての點に於てなり。神は其聖靈と其聖潔と
を吾人に滿たさんとを望ませ給ふ。是れ神の目的なり。抑も亦試煉の學
校に在學せる諸君の目的たらざるべからず。

二　試煉に臨む時には聖書を以て其の教課書とせよ。試練の中にある
時には、宜しく神が苦痛によりて其の律法中より吾人に教へ給はんと
する處を學ふべし。聖書は必ず諸君に啓示せん、天父何故に諸君を懲治
するか又如何ばかり深く懲治の中にも諸君を愛するか、又如何ばかり
其慰藉の約束の優渥なるかを。試練は天父の約束に新榮光を與ふべし、
されば懲治に遇ふ時は宜しく聖書に歸るべし(一)。

三　イエスをして諸君の教師たらしめよ。イエス自らは苦痛によりて
潔くせられたり。イエスが圓滿なる從順を學び給ひしは、即ち苦痛によ
りてなり。イエスは驚くべき同情心を有し給ひき。諸君宜しくイエスと
親密に交際せよ。或は人の爲めに語り、或は人と共に語るを以て、是れよ
り慰藉を得んとするとなかれ。イエスに與ふるに諸君を教ふるの好機
を以てせよ。靜かなる地に退きてイエスと深く相語らふべし(二)。天父は
諸君を潔めんが爲めに、道と聖靈と主イエスを與へて諸君の聖潔とな
し給へり。苦痛と懲治とは、諸君をイエスの聖潔に與らせんとて、道に近
つけ、主イエスに近づくるの目論見に出でたるにあらざるなし。されば
慰藉自からが諸君の慰藉として來たるはイエスと交際するに由りて
なり(ホ)。

四　諸君從順なる生徒たれ。己が無智なるとを承認せよ。自ら神の聖意を解し得たりと思ふなかれ。主に乞ふに諸君が苦痛に由りて學ばざるべからざるの教訓を教へ給はんとを以てし、且つ之を待つべし。柔和なる者には教訓と智慧の約束嚴として存す。耳の開かれんとを求めよ、其心安靜にして且つ神に向はんことを求めよ。試練の學校に諸君を置きしものは、天父なることを知れ。神の宜ふ所を聞き、神の教へ給はんとする所を學ぶ爲めに、唯々諾々己れを神に獻げよ。左すれば神之によりて大に諸君を祝福し給ふべし(〇)。

詩九十五、〇同九十二、〇廿五、廿五、〇四、〇五

『爾の懲しめ給ふ人、なんぢの法を教へられたる人は幸なるかな』『なんぢら各樣の試誘に遇ば之を喜ぶべき事とす可し』『なんぢら全く且つ備はりて缺る所なからん爲なり』。試誘に遇ふ時は、それを祝福の時と思へ。天父と親密の交際をなす時と思へ。神の聖潔に與かるの時と思へ。左すれば喜悅を以て『我が困苦にあひたりしは我によき事なり』といふを得べきなり。

父、なる神よ主は聖語に由りて此世の暗黑なる誘惑試練の上に榮光ある光明を與へ給ふことを深く感謝し奉る　主は此れに由りて我を教訓し我をして主の聖德に與からしめんことを望み給ふ　主よ主は愛子の苦痛と死を以て我儕に聖德を授くるに足らずと思ひ給ふや我は其恩寵に與らんが爲め主の與へ給ふ苦痛を拒むべき乎　否父よ我は

主の行ひ給ふ貴き御行を感謝し奉る　願はくは主の聖旨を我がうちに成就し給はんことを　アーメン

一　懲治を受くるの際、吾人の第一に心得さるべからざることは、是れ神の聖旨なりといふこと是れなり。勿論、試練は吾人自己の罪銹なるため、或は人類の暴戻なるよりして來るものなれども、神はその聖旨に由り、罪銹若しくは暴戻を手段として吾人を苦痛に置き給ふものと承認せざるべからず。吾人は明かに之をヨセフと主イエスに於て見る。吾人は唯々諾々是れ神の聖意なりと承認するにあらざるよりは遂に何等の平安たもあるべからざるべし。

二　第二　心得べきことは、神の聖ませ給ふ所、只獨り試煉にのみ止まらず、亦之れにより慰藉と能力と福祉とを授けんことを望ませ給ふといふこと是れなり。大凡そ懲治を認めて神の聖意となすほどの人は、聽て神の聖意としての之が附屬物を發見し、經驗するに相違なし。

三　神の聖意の完全なるは神自からの完全なるが如し。されば己れを捨てゝ此の聖意に從ふを慣るゝなかれ。神の聖意は無條件的に善なるものと心得て、損失を受けたるものは、一人も是れあることなきなり。

四　神の聖意を知り、神の聖意を敬愛し、自己を全く之と一脉ならしむる、是れ即ち聖潔なり。

五　諸君願はくは試煉に過ふ時、人に由りて慰藉を求むるなかれ。過度に人と交はるとなかれ、却て試煉を思ふて神及び神の聖言と交はるべし。試煉の目的は、諸君を地上のものより轉回せしめて、神に歸り、神の完全なる意思と諸君の意旨とを一体ならしむるにあり。

第卅四章　祈禱

『なんぢ祈る時は嚴密なる室に入り戸を閉て隱微たるに在す爾の父、に祈れ、然ば隱微たるに鑒たまふ爾の父は明瞭に報ひたまふべし』―太六〇六

靈性上の生命は、其發達と共に祈禱に關係すると大方ならざるものなり。我れ多く祈ると少く祈ると、又愉快を以て祈ると義務的に祈ると、又神の言に基づきて祈ると我が心の思ふまに〳〵祈ると、により、我が生命は或は以て榮ふべく或は以て衰ふべし。吾人は前掲の

イエスの言に由りて眞正なる祈禱の主眼を知るとを得。

獨座神に對す。是れ第一の要點なり。我れ若し妨害を受くるとなしに神と相語らはんとすれば、戸を閉ぢて世と人と交通を絶たざるべからず。

創廿二、十八、○廿三、二、同○廿五、同廿、二、三、○出廿四、十三、○十一、三、

昔は神其僕に謁を賜ふ時には、之を獨り其前に引見し給へり(イ)。故に諸君も祈りをなさんとする時には第一に先づ思ふべし、此室内には神と我と互に面を對すと諸君の祈禱の力は一に神我に近してふ確信の厚薄に是れ由るなり。

汝の父の御前是れ第二の要點なり。諸君が嚴密なる室に入るは、天父其の愛を以て其室内に諸君を待ち受け給へばなり。諸君はよし冷淡に暗黑に、有罪なるにもせよ、又諸君はよし祈るとを得るや否や疑はしきにもせよ、天父其室内に在して諸君を待ち受け給へば諸君は其室内に入らざるべからず。諸君宜しく其身を天父の眼の光の下に置くべし。又其の父の如き愛を信ぜよ。此の信仰だにあらば、祈禱は必ず出づべきなり(ロ)。「神の應答を確信せよ。是れイエスの御言の第三の要點なり。『爾の父は明かに報ひ給ふ可し』。主イエスは祈禱の應答の確實を斷言し給ひしほどに然かく斷言したるものは一も是あらず。諸君願はくは約束を審慮せよ(ハ)。詩篇は神の聖徒の祈禱書とも稱すべきものなるが、其中に神を以て祈禱を聞き應答を與へ給ふ神となせると枚舉に遑あらざらんとす(ニ)。

太六、○八、同七、○十一、

太一、五、○一八、七、同十廿、四、路八、○十四、八、○十四、三、同十一、

諸君は自ら祈禱の應答を妨ぐるものを多く所有せらるゝとならん。應

答の延引は吾人に取りて極めて有り難き教訓なり。吾人之に由りて我が祈禱の正鵠を失せざるや否やを自省し、我が實行の眞に我が祈禱と相戻らざるや否やを自省するに至るべければなり。加之一層吾人を皷舞して信仰を純潔に鍛錬せしむべければなり(ホ)。加之、神と一層親しく、一層忍耐して相語らふに至らしむべければなり。更に亦應答を確信するとは、力ある祈禱を爲すの秘訣なり。望むらくは此の確信を吾人の祈禱の主眼たらしめよ。諸君祈禱を捧ぐる時には其中途にて暫らく停止し、我は我が祈るものを受くるとを信ずるや否やと自問せよ。諸君の信仰をして應答は與へられしものとして之を受け、且つ之を確握せよ。應答は諸君の信仰の儘になるものぞかし(ヘ)。

(七、同十六、同廿四、三、廿四、五、同四、同六、同十、同十、七、同十、六、二十二、二十五、同二、七、十、同三、十四、七、十八、同三、十六、同十、四、同十六、三、五、十六、同十六)

愛する弱年の信徒諸君、諸君に若し一事の意識せざるべからざるものありとせば、そは即ち他なし、神と密室に相語らふと是れなり。諸君の生命はキリストと偕に神の中に藏れあり。諸君は日々の祈禱に於て其日に要するものを上天に乞ひ奉り、信仰に由りて之を受けざるべからず。日々天父と身親しく交通し、イエスキリストに由りて新しく且つ強くせられざるべからず。神は吾人の救、吾人の力なり、キリストは吾人の聖潔なり。吾人活ける神と交通して初めて其祝福を得べきなり。

信徒諸君篤く祈るべし常に祈るべし、絶ゆるとなく祈るべし。諸君若し祈る志あらずとするも、努めて嚴密なる室に入るべし。天父に奉るべきものゝ一物だに是れあるにあらざる身として之に入り、只其の愛心に

(九、書七十前廿、二、八、〇同十廿、四、八、〇同廿十、七、三十廿、八、八、〇六同、十五、廿一、〇十箴、三、十五賽一、〇三、米三、〇四、基一、九、〇一、〇六、雅、同四、〇五、同三、〇十六、詩一、百四十、〇五、詩三、〇九十、賽三十九、十九、耶)

三十三、三〇
三十、馬三
〇十、太廿
九九、〇同
九十廿
五八、〇約
八三、〇壹廿
二、同五
〇十四、
十五、

依頼し信仰によりて己れを其の寶前に置くべし。天父の許に往き天父の寶前に居るとは、是れ已に一種の祈禱にして神は此の旨を諒し給ふなり。神の寶前に出づるとはたとひ受動的なるにもせよ、それに由りて祝福を得ることを確信せよ。天父は聽き給ふのみならず、密かに之を見、明顯に之に報ゐ給ふべし。

オー我が父よ、主は信仰の祈禱に應ゆべしと堅く聖語に由りて約束し給へり　願はくは主の聖旨に適ひたる祈禱をさゝげ得んが爲めに祈禱の靈を我に滿たし給へ　祈禱の應へを妨げざらんが爲めキリストに由りて凡ての罪惡を取去り給ひし宏大なる御恩寵を我に示し我が愚、なると弱きとに由りて主の恩寵を黜くることなからん爲めに聖靈わがうちにありて、代求給ふことを教へ給へ　願はくは三位一躰なる主を信ずる信仰を以て祈るべきことを教へ信じて願ふ所は必ず與へらるゝとの確信を授けたまはんことを　アーメン

一　祈禱の最大要件は信仰なり。信仰の全部新生命の全部皆信仰に由る、故に亦祈禱に由る。人多く祈ると雖、而かも其應答を得ざる所以のものは、祈禱に信仰なきか故なり。我は祈る前に、亦祈る間に、亦祈りたる後に我は信仰に由りて祈るかを自問せざるべからず、又我が全心を以て信ずと自答せざるべからず。

二　斯る信仰に達するには、時日を惜まず祈禱せざるべからず。此の時日に於て靜かに且信仰して身を神の前に置き、其御前にあるを確信せよ。此の時日に於て神と交通して我が靈魂を潔めよ。此の時日に於て約束の言を堅く握り、信仰して用ゐ得るやう聖靈に求めよ。此の世の智識、此世の産業、此世の食物、朋友との交際皆時日を必要とす、充分の時日なくては何事も成就するとあるべからず。果して然らば吾人神と交はるに充分の時日を費すを惜み、尚ほ且つ如何に祈禱すべきか、如何に祈禱の力と祈禱の祝福を受くべきかを知らんとするは不倫も亦甚だしからずや。

三　而して吾人は日々時間を有せざるべからざるのみならず、亦日々忍耐なかるべからず而して時間の必要なるは、吾人自ら神に受けられし身なりとの確信を長ぜん爲めなり。吾人の祈禱には力ありて、神の御意にかなひ、神に背かるゝものなりと、確信するに至らん爲めなり。吾人は祈禱の方法を熟知せるものと自認し、唯求むれば足ると自惚るゝが如きとあるべからず。然り祈禱は神との會話なり、神との交通なり、神は之を機會として吾人の中に働き、吾人の靈魂亦之れに由りて自己の意思と自己の力を泯滅し、神に懷きめられ、神と一体となり了るなり。

四　次の一例は思ふに忍耐の祈禱を奬勵するに於て多少の益あるべし。近頃ジョージ、ミューレルカツタに於て一場の演説を試み、一千八百四十四年、五人の未信者を心に念じ、其悔改のために祈禱を初めたるとを自白せり。爾後十八ヶ月にして其の五人の第一

人初めて悔改し、更に五年を費して初めて他の一人の悔改するを見たり。されど第三人の悔改は實に十二年半の後に現はれぬ。尚ほ他の二人の爲めには、ミュールは已に四十年の久しき、一日だに祈禱を忘りたることなきも今日に至るまで未だ以て悔改むるに至らずといふ。されどミュールは此の二人も頓て其の祈禱の應答として彼れに與へらるべき日あるを確信し、意氣少しも衰へざるなり。

五　拙著『祈禱の學課』With Christ in the school of prayer には祈禱の生涯の要點を説明すること、靜思を重ねること前後三十一回に及べり

第卅五章　祈禱會

（太六、六〇、路九、十八、廿八）

『我れまた爾曹に告げんもし爾曹のうち二人のもの地に於て心を合せ何事にても求めば天に在す我父は彼等の爲に之を成たまふべし蓋わが名の爲めに二三人の集れる所には我も其中に在ればなり』――太十八、〇十九、二十

主イエスは嚴密なる室に行き、密かなる祈りを以て親しく神と語り、人に見るゝなからんことを吾人に語り給へり、而して此の主イエスは亦もや他の人と共に偕に祈るべきことを吾人に語り給へり(イ)。而して主

イエス天に昇り給ひし後一百二十人の男女が十日の間、開きたる祈禱會に由りて基督教會は誕生せり(ロ)。ペンテコステの日は實に是れ一致協同、忍耐して祈禱を献げたるの結果なりき。或ひは主イエスを喜ばせ奉らんと欲し、或は教會若しくは集會に聖靈の恩賜を來さんと欲し、或は神の諸子と交通するの祝福を得んと欲する人々よ、願はくは祈禱會に參列し、主イエスが其約束を守り給ふや否や特別の祝福を與へ給ふや否やを實地に驗せよ(ハ)。又此の祈禱會を助け、眞に主の吾人に賜ひたる祈禱會たるに背かざらしめよ。

有益なる祈禱會に第一無かるべからざるものは、會員の願ふ所相一致することと是れなり、吾人は皆眞に神より之を得んことを望むものあらざるべからず。而して此物に關して吾人は相和合する所あるを要す。即ち祈禱者は必ず皆心に愛あり、且つ一致あらざるべからず――爭鬪嫉妬、憤怒、薄情は皆祈禱の力を薄弱ならしむるものなり(ニ)。――之に次で願ふ所の目的物の一致を要す(ホ)。此の目的を達する爲めには祈禱會に於て豫め其祈るべき題を廣告するを至當とす。而して其題は教會の或會員の身上と定めて、其人の或る必要のために祈るも可し。或は今少し廣き要求、たとへば、或る未信者の悔改の如き信者の、信仰復興の如き、教師の奮激がれん爲めの如き、天國の擴張の如きことのために祈るも可し。然れども其祈禱の題に於て會衆相一致したればとて是れにて其の一致は已に充分なりと思ふは大早計なり、然り、吾人は此問題を心と實

イ代下二十
ロ使一〇十四、
ハ代下二十四、
ニ詩百卅三〇一、三、
ホ耶五十八〇四、太廿五〇五、廿四、三、可十一〇廿五、
ヘ尼九十二、
ト耳二十六、三十七、十七、使一〇二十五、
チ耶三十二〇三十九、使四十四、

行に取り入れ、之を絶えず主の御前に提出し、内心に主の之に答へ給ふべきを熱心信仰せよ。此に於てか吾人は初めて有力なる祈禱を捧ぐるを得べきなり。

第二に正當なる祈禱會に缺くべからざる一要素は、イエスの名に由りて集まり、イエスの御前にあることを意識すると是れなり。聖書に曰く、

『エホバの名はかたき櫓の如し義者は之に走りいりて救を得ん』(原譯者曰く蘭語聖書には『高堂に置かる』とあり)(一)。夫れ名は實の賓なり。而して信者の相會するや、皆各々イエスの名に入り、此名を己が城砦とし、住家として其中に居を共にせざるべからず。此名に由りて信者各自、父の御前に一躰となり、此名に由りて相祈らざるべからず。此名は信者をして互に眞實忠誠ならしむるものなり。而して又斯くの如く此名にある時は、活ける主イエスは、其の會衆の中に在し給ふなり。是れ即ち天父確かに其の會衆の祈りを聞き給ふ所以なりとは主の親說なり(二)。此會衆は主にあり、主また此の會衆にあり、其の祈るは主に由りてなり、而して其の祈りは主の力に由りて天父の御前に達するなり。アヽイエスの名を以て吾人の祈禱會の一致の燒點たらしめよ、又た祈禱會の集會所たらしめよ、左すれば吾人、主の吾人の中に在し給ふことを意識すべきなり。

第三に主の語り給へる祈禱會の特質は吾人の要請するところ確かに天父に答へらるべしといふことと是れなり。祈禱は確かに答へらるゝも

(一)エペ十、十八〇

(二)約十四、十三、十四、同五、十七、同十六、十六、廿四、廿三、廿四

のなり。ア、吾人は今日尙ほ『エリヤの何所にありや』と呼び奉るを得べし、是れ此神は答へを與へ給ひし神なればなり。エリヤ民に語りて曰く、『祈に答へ給ふ神を以て汝等の神と爲すべし』と。又エリヤ神に語りて曰く。『エホバよ我に應へ給へ此民をして汝エホバは神なることを知らしめ給へ』と(チ)。吾人篤く祈り、絶えず祈り、而して答を得ざるも尙ほ之に甘んずるが如きとあらば遂に神の答を得るとなかるべし。されど吾人若し應答は即ち吾人の祈りの、神の聖旨に偕ひし證據と心得、應答を得ずしては、甘んずると能はざる時は驕て我が祈りに缺點あるを發見すべく、應答を得らるべき祈りを捧ぐる身分となるを得べし。而して吾人は必然主喜んで此の答を與へ給ふべしと確信するを得べし。神の民たるもの斯くの如くにイエスの名に入り、此の名に由りて祈る時は其の求むる所を與ふるを得ることは是れ併しながら神の本懷にてあるなり(リ)。

(チ) 代上十八、三十廿四、七、雅五十、六

(リ) 徒十二、五、哥後一、十、雅四十、三、同五十、六、十七

神の諸子よ、諸君はたとひ年若く、且弱くとも茲に主イエス自ら諸君の祈禱に助けを與へ給はんとて組織し給へる一の學校あり。祈禱會是れなり。諸君此の祈禱會を利用せよ。諸君祈禱と信仰の精神を以て主の名と主の御前を求めて之に出席せよ。諸君己が兄弟姉妹と共に住み共に祈るとを求めよ。諸君其祈禱に榮光ある應答の與へらるべきを確信せよ。

密室に於て祈ると共に人々相集りて公に祈るべきことを命じ給へる恩寵深き主イエスよ　願はくは密室の祈禱に由りて公會の利益を一層さかんならしめ之が爲めに準備をなし又主の民の相會して偕に祈ることの必用を感するに至らしめたまへ　公會に主の在し給ふことに由りて恩寵を得せしめ主の民と交はることに由りて祈禱の應驗を豫期する信仰を強めたまはんことを　アーメン

一　祈禱會によりて大なる祝福を得つゝある地、決して尠しとせざるべし。敬虔なる男女が一週一回、若しくは日曜の午時に、近邊の住人が集めて祈禱會を開けば、又大なる祝福を得べし。本書の本章を讀まるゝ讀者よ、諸君の近傍には果して斯る祈禱會の必要あるやなきやを熟考あれ。而して主の名によりて之れに着手せられよ。されば余は熱心にすべての讀者に乞はんとす、諸君の地方には祈禱會の設けありやと。若しあらば、諸君は忠實に之に參列せらるゝ乎、諸君は其の名に由りて神の諸子相集ひ、其御前にあるとを經驗し、其祈禱に答へ給ふといふことを經驗することは何の意なるかを知る乎。

二　『祈禱の時間』(The Hour of Prayer) と題する一書あり、斯る集會に讀み上ぐるに相應しき部分多し。或は此の『新生命』を用ゐ、其の一章を朗讀し、引照を尋ねて之に就て語らはれなば、祈禱の材料に少補なくんばあらず。

三　祈禱會は密室の祈禱に害を及ぼさゝるかとは、吾人の往々耳にする一問なり。然れども、余の經驗は其の結果正しく之れに反對なり、祈禱會は祈禱の學校なり。信仰未熟の人は先輩の祈禱を聞きて學ぶ所あるべく、祈禱の材料を得べく、自ら省みるの機會を得べく、一曆祈禱を勤むべき奬勵を得べし。

四　祈るべき一定の目的物を會衆に豫告すると、願はくは一曆祈禱會一般の風習たるに至らんとを、而して其物は宜しく誰しも確かに、且つ信じて注目するを得るものたるべし、又其の答への來るとあらば、誰しも必ず之を知り得るものたるべし。斯くの如き豫告は、大に一致の精神を策進し、信仰ある希望を奬勵するものなり。

第卅六章　エホバを畏るゝ事

『エホバを讃まつれ　エホバを畏れてそのもろ〳〵の誡命をいたく喜ぶものはさいはひなり　彼は惡き音信によりて畏れずその心エホバに依頼みてさだまれりその心かたくたち慢るゝ事なく敵につきて願望をつひに見ん』――詩百十二〇一、七、八、

『此に於てユダヤ、ガリラヤ及びサマリア中の教會は平安に且成立ちて主を畏れ事を行ひ聖靈の勸に由りて其數いや增れり』――使九〇三十一、

イ 創十五、一〇賽八、十三〇耶卅二、四十〇羅八、十五〇徒前三、十四〇約壹四、十八
ロ 詩廿二、廿四、廿六〇同百十二、一〇同百十五、十三〇箴廿八、十四
ハ 太八、廿

聖書は『畏れ』といふ言を二様に用ゐたり。即ち或時は之を一種の不正なること、罪悪あることゝ看做し、極めて激烈なる辭を用ゐて『畏るゝ』とを禁じたり(イ)。されど『畏るゝ勿れ』てふ語は聖書の中殆んど百回に近し。之に反して又他の多くの場合には、『畏れ』を稱讃して眞正なる敬虔の一確徴となし、神に承けらるゝもの神の祝福を受くるに足るものとなせり(ロ)。されば神の民は『エホバを畏るゝもの』といふの證あり。斯くの如く二様の意味の相違は、如何といふに、別段六ヶ敷ことにはあらず。一方は即ち不信仰の畏れにして、一方は信仰の畏れなるが爲めのみ。『畏れ』若し神の信仰と相伴はざる時は、其の『畏れ』は罪悪なり、有害なり(ハ)。之れに反して『畏れ』若し神の信仰、神の希望と相伴ふ時は、正に是れ人の靈性の生命に

六〇默二十一、九
ニ 詩三十三、十八〇同百四十七、十一〇路十二、四、七
ホ 詩五十六、五、十二〇箴一、七〇同九、十〇同十、廿七〇同十

片時も欠くべからざるものとなるなり、『畏れ』の目的物にして若し人類或は世に屬するものならん乎、此の畏れは神の刑罰に該當す。『畏れ』若し小供の如き信念と愛とを伴ひ、天父を敬ひ奉るものなれば、此の『畏れ』は神の命ぜさせ給ふ所なり(ニ)。聖書に祝福と能力の根源として記載せられたる『畏れ』は主を信じて畏るゝの『畏れ』なり、奴隷的の『畏れ』にはあらで、父子の間に存するが如き『畏れ』なり。夫れエホバを畏るゝものは、他の何物をも畏るゝことなし。エホバを畏るゝことは智識の根源なり。エホバを畏るゝとは、神の仁惠と神の保護を得る確かなる途なり(ホ)。

信者倘ほ其の幼少にして未だ全く信者とならざる前より、已にエホバを畏るゝの習慣を養はれたる人もあらん。是れ甚だ大なる幸福なり。エ

（九、二十）（三、〇、徒十九）（一〇、三、哥後七、一〇、）

ホバを畏るゝことを教へて其子を育つるは父母の之れに與ふる最大惠福なり。斯くの如き教育の中に成人して信者となる人は、誠に宏大なる便宜を有するの人といふべし。之を切言すれば斯、る人は主の喜びに於て歩むべき準備を整へられたる人なり。之に反して若し人斯、る準備を有せず突然悔改に至る時は必ずや特別の教訓、特別の警戒を受け、以て此の聖き『畏れ』を祈求し、且つ喚起するの必要あり。

此の『畏れ』の成分たる要素は其數多く、且つ皆榮光あるものなり。今其重もなるものを擧ぐれば左の如し。

此の『畏れ』ある時は神の榮光ある威嚴の前に跪き、全聖者の前に出づる時聖き尊崇、聖き畏敬あるべし。此の尊崇、畏敬は神の神たるを忘れ、或ひ

（伯四十二、〇六、詩五〇八、賽六、〇二、五、哈二、〇十、二、〇三、亞二）（路十八、〇羅二、四、十一、〇二、彼前三、十、〇五、）

は神を神として敬ふを懶しとするが如き輕薄の念を制するものなり（一）。

又此の『畏れ』ある時は、戰々兢々として深く自ら謙遜し、己れを恃むとなくして只神に信賴するの心あるべし。人若し己れの弱きを自覺し、己れの狡猾を認識する時は、神の意思と其名譽に悖るが如きとをなすを畏るべし。されど斯、る人は其の神を畏るゝが爲めに、確かに、神の保護を恃むなり。而して此の謙遜は即ち亦其人の同胞との交際上にあらゆる便宜を與ふるなり（二）。

又此の『畏れ』には謹慎即ち警戒を含む『畏れ』は聖き先見あるが故に、己れの歩むべき正路を知らんとし、油斷なく敵の襲來を警戒し言語、判斷、動

作の輕忽と粗暴を制するものなり(チ)。

又此の『畏れ』には聖き熱心と退嬰進攻の勇氣とあり。神の僕として何事も我意を恣にせず、只管神の聖旨に背くを是れ畏るゝは如何なる小事にも忠信なるべきを奬勵するものなり。エホバを畏るゝとは、凡ての他の畏れを除き、勝利の確信に無限の勇氣を付與す(リ)。

又此の『畏れ』よりして喜樂生ず。『戰慄をもてよろこべ』エホバを畏るゝとは喜樂を益々深からしめ、益堅からしむるればなり。『畏れ』は根にして喜樂は果なり。故に『畏れ』愈々深ければ喜樂は愈々高し此故に聖書に曰く『エホバを懼るゝものよエホバをほめたゝへよ』又曰く『エホバを畏るゝ者よエホバをほめまつれ』(ヌ)。

チ　箴二十一、五
リ　同八十二、十一
ヌ　詩二十二、二
ル　同十三、十三
ヲ　同十三、六
ワ　同十三、十
カ　申六、四
ヨ　同十一、七
タ　同十一、六
レ　同十一、十
ソ　同二十、二
ツ　同二十、二
ネ　同二十、二
ナ　同二十二、十
ラ　同二十四、十
ム　同二十四、十
ウ　同二十四、十
ヰ　同二十四、十
ノ　同二十四、十
オ　同二十四、十
ク　同二十四、十
ヤ　同二十四、十
マ　同二十四、十
ケ　同二十四、十
フ　同二十四、十
コ　同二十四、十
エ　同二十四、十
テ　同二十四、十
ア　同二十四、十
サ　同二十四、十
キ　同二十四、十
ユ　同二十四、十
メ　同二十四、十
ミ　同二十四、十
シ　同二十四、十
ヒ　同二十四、十
モ　同二十四、十
セ　同二十四、十
ス　同二十四、十

弱年の信徒諸君、諸君の父なる神の聲を聽け。『エホバの聖徒よエホバをおそれよ』。エホバを畏るゝの念と、エホバを愛苦せしむる凡ての事を畏るゝ念を其心に滿たすべし、左すれば恐るべき禍もこれあるとなからん。エホバを畏るゝ人エホバを喜ばすことをなさんと欲する人にはエホバも亦その人の願ふ所のことを爲し給はん。幼子の如き信仰を以て神を畏るれば、自ら神を愛し、神を喜ぶに至るべく、卑屈なる、不信仰なる臆病なる畏れは一切其跡を絶つに至らん

オ、わが神よ我心をして主の聖名を畏るものとなしたまへ願はくは我をして常に主を畏れ主の恩寵を待望むものとなしたまはんことを

アーメン

一　神を畏るゝとの祝福若干を示せ(詩卅一〇二十、同百十五〇十三、同百二十七〇十一、同百四十五〇十九、箴一〇、同七〇、同八〇、同十三。同十四。同二十七。徒十〇三十五)

二　何故に吾人は神を畏れざるべからざるか(申十〇十七、二十、二十一、書四〇廿四、母上十二〇廿四、耶五〇廿二、同十〇六、七、太十〇二十八、默十五〇四)

三　人の靈魂に『畏れ』を滿たしむるものは、神の偉太、能力、榮光を知ると是れなり。されど之が爲めには吾人身を神の御前に置きて緘默し、堪へ忍びて吾人の靈魂、神の威嚴を感ずるまでに至らざるべからず。

四、『エホバは我をもろ〳〵の畏懼よりたすけいだしたまへり』、此の語果して能く諸君を惱ますもろ〳〵の畏懼に適當したりや否や。或は人を懼るゝものあり、(賽二〇十二、十三、來十三〇十六)、或は猛烈なる試煉を懼るゝものあり(賽四十〇一、二)或は己れの弱きを恐るゝものあり(賽四十一〇十)或は神の業を恐るゝものあり(代上廿八〇二十)或は死を恐るゝものあり(詩二十三〇四)是等の恐懼は皆エホバを畏るゝによりて取り除かるゝなり

五、『エホバを畏るゝものはさいはひなり其の心かたくたちて懼るゝこと無かるべし』。諸君今は此の語の眞意を解せられたりや否

や。

第卅七章　全き献身

『イツタイ王にこたへていひけるはエホバは活く王我主は活く誠に王我が主いかなる所に在すとも生死ともに僕もまた其所に居るべし』―母後十五〇廿一

『然ば如此爾曹その所有を盡く捨てざる者は我が弟子となることを得ず』―路十四〇三十三

『又なんぢら彼等の中より出で之を離れ汚穢に捫はることを勿れ我なんぢらを納んわれ爾曹の父となり爾曹わが子女となるべしと言へる是れ全能の主の言なり』―哥後六〇十七、十八

『然のみならず我れわが主キリストイエスを識るを以て最も益れる事とするが故に凡てのものを損となす我れかれの爲めに既に此等の凡てのものを損せしかど之を糞土の如く思へり』―腓三〇八

己を捨てゝ主に献ぐるとは一回は一回よりも信者に取りて新しく且つ深き意味を生すると、余輩已に前に之を論述せり。而して信者此の意味を嘗ふ時は、此の捨己は完全なる献身、純一無雜にイエスに事ふるの意に外ならざるとを悟るべし。夫れ神殿は專ら神の禮拜のためにのみ奉献したるものなり、此を以て何人も只其の禮拜の爲めにのみ存するとを知る。神壇の祭物は只神の命令のまに〳〵用ゐらるべきものなり、此を以て何人も神の命せさせ給ふにあらざる以上、たとひ其一部分たりとも擅まゝに之を處置するの權利あるとなし。是れと等しく諸君も亦全く主に屬するものなり、諸君は二心なく己を主に献げざるべからず。神は終始斷絶なくイスラエルの民に告げて其之を救へるは即ち主の有たらしめんか爲めなりと宣へり(イ)。乞ふ吾人をして此中に含蓄せる意味を研究せしめよ。

先づ其第一は親しくイエスを愛し、密室にイエスと交通する是なり。イエスは吾人の靈魂の愛するもの、吾人の靈魂の希望するもの、吾人の靈魂の喜たるべく而して亦然らざるを得ざるものなり。さて吾人の献身せざるべからざるものは初めより神に奉仕せんとてにはあらず、イエ

イ出十四、十九、一〇、五、利、九、一〇、八、申、六、十、二、十、一、哥、三、十、〇、十、七、羅、〇、前、十七

ス約一四〇
を吾人の朋友吾人の王として吾人の贖主吾人の神として之れに奉廿五、十
仕せんとてなり(ロ)。吾人をして生涯完全なる献身の狀態に居らしむる四十五、約
ものは只夫れ個人的の愛念の感激あるのみ。されば主イエスは常に『我同廿七、一〇
が爲めに』といひ、又は『我に從へ』といひ又『我が弟子』といへり。愛念の中心十二、加〇
點は即ち獨りイエスにあらざるべからざるなり(ハ)。イエスは自ら己を太十〇廿
吾人に與へ給へり、されば廿二、三
イエスを我有とし、イエスを愛し、イエスに依廿七、
賴するはイエスの弟子たるものゝ特質なり。路十四、
第二は公けの告白是れなり。凡そ人何物をか授けらるれば、其物に乘廿八、
な之を其人の財産なりと認定すべし、其人の產業は其人の榮光なり。主三、
イエスの靈魂を贖ふて之に大なる恩寵を現はし給ふや世の之を見、之七、
を知らんとを望み給へり。即ち靈魂の所有者として認定せられ尊敬せ廿六、
られんとを望み給へり。又イエスは凡ての人、己に屬するとを告白せん出二十三、
とを望み、且つイエスは王なりと告白せんとを望み給へり(ニ)。然るを若書十六、
し此の如き公けの告白をなすとなくば其捨己は專一完全の者にあら廿四、
ず。尙ほ此の公けの告白一部として必要あるとあり、他なし、吾人其民と十五、
連合し之を吾人の民として承認すると是なり。されば主は吾人が其弟約廿三、
子たるとを弘く公認せらるゝ爲の標徵として一の新しき誡を與へ給〇
ひたるが、こは即ち兄弟相愛の一事是れなり。或る一地方にある神の諸
子は或は其數少く、或は世人に侮慢せられ、或は缺點に滿ちたるべしと
いへども諸君は之と連合せざるべからず。諸君彼等を愛せよ、諸君彼等

と交際を結べ或は所轄會に或は他の集會に彼等と親炙せよ。熱心に彼等を愛せよ。兄弟相愛は驚くべき力ありて、吾人の心を開き神の愛を入れ、神を宿すに至らしむるものなり(ホ)。

献身を完全ならしめんとすれば、罪を離れ、世を離れざるべからず。潔からざるものに觸るゝなかれ。世は惡魔の權下にあるとを知れ。世の幾分までは其儘自己の手元に留めて差支なきやなど思ひ惑ふなかれ。罪とは如何なるものにて、律法に從ふとは如何なるとなるかなど思ひ惑ふなかれ。信者は往々にして、全く神にありて生活せん爲めには律法にかゝへるものにても、尚ほ之を放棄せざるべからざることあり(ヘ)。圓滿に主イエスに摸倣せんとすれば律法にかゝへることといへども、尚ほ之

ホ 得一、約一十五、羅十二、五十二、十二、哥前二〇、一一、弗二十四、〇四、彼前十、六、二、〇、哥後十

ヘ 哥前八、十三、同九、五、廿〇、廿七、同廿、三、六、哥後十

を禁止するの止むを得ざるとあり。諸君願はくは神と神の聖潔のため眞に聖別せられしものとして此世を送れ。イエスの爲めには何事をも抛ち寧ろ之を保つを損とするものは、此世に於てすら、尚ほ且つ百倍の恩賞を受くべきなり(ト)。

而して我は凡てのものより聖別せしものを用ゐん。完全なる献身は、只吾人をして神の爲め、神に奉仕するため有用に且つ適當ならしむるを其主眼とす。諸君は神我を必要とし給ふか、將た然らざる乎我を大なる福祉の基とし給ふか、將た然らざる乎などいふ疑念を寸毫たりとも懷くとなかれ。只余さず殘さず、己れを主の手に献げ奉るべし。己れを主に贈呈して其祝福と、其愛と其靈とに滿たされよ。左すれば諸君は福祉の基

ト 創廿二〇、十六、十七、代下廿五、路十〇、九、廿、八、〇廿、九、約十廿、二、〇廿、四、廿五、腓三、八、〇、提後二〇、四、

哥前十五〇十、加

哥後九〇八、撒後一一、〇十二

たるべきなり(チ)。

何人にもせよ、此の完全なる献身は我に取りて過分の要求なりと思ふとあるなかれ。諸君は只要求を事として一片の能力をだも與ふるとなき律法の下にあるものにあらず。否諸君は恩寵の下にあり、而して恩寵は諸君に代りて自ら其要求を果すなり(リ)。故に諸君は天父が吾人に代りて萬事を爲す爲めにとて與へ給ひし第一の捨己者イエスに傚ひ奉り己れを此のイエスに献げざるべからず。献身は信仰の行爲なり、榮光へある信仰の生涯の一部分なり。此故に諸君は宜しく言ふべし、我が之をなすは我にあらず、我が衷にある神の恩寵のなす所なり。我は我が衷にはたらき我をして志をたて事を行はしむる主を信じて此世を送るなりと(ヌ)。

二〇、二十、腓二〇十三、

恩寵に富みたまふ主よ我心の眼を開きて主は如何程まで我を主の有となさんことを望みたまふやを教へたまへ　願はくは主は我心の奥底を占領る唯一の權能となりて、我を主の有として保存ちたまへ　凡の人々をして我王は主に在して我は唯主の聖旨をのみ求むるものなることを知らしめたまへ　我の此世に傚はざるに由り主の聖旨と主の民に服從するに由りて我は全く然り全く主の有なることを顯はさしめたまはんことを　アーメン

一

余は其の眼の開かれんため、神に祈り奉れと諸君に勸むべきを多かり、就中神の望ませ給ふ完全の献身について其眼の開かるゝやう祈らんこと余が切に希望する所、余はキリスト教生涯の中に、之を求むるほど急務なるものはあらずと思ふなり。吾人の思想を以てしては、如何ばかり完全に神は吾人の憲思を其有さなし、吾人の中に住まんとを望ませ給ふかを想像する能はず、是れ決して余一家の私言にはあらざるなり、已に吾人自ら之を想像する能はずとすれば、聖靈即ち之を吾人に啓示せざるべからず。一たび聖靈の啓示を得れば、此に吾人は初めて我が理會の如何ばかり小さきものなりしかの確信生ずるなり。思ふとを止めよ、我は全く神の爲めに生活せざるべからずと雖、到底之を實行するの力なしと。然り吾人は却て盲はざるべからず我は尚ほ盲目なり、我は尚ほ神を我萬事として生活するとの榮光那邊にあるかを知る能はず、我れ若し一朝我目開け、而して之を見るとあらば、之を我に全ふするものは、我にあらで神なるとを確信し、信仰すべきなり。

二

諸君は已れを神に献げ、純一無雜に神にありて生活するものなりや、否やといふに就ては、一點たりとも疑を起すとなかれ。寧ろ此の確信を厳神の御前に告白し奉るべし。諸君は未だ之が何の意たるを知らず亦解せざるとを自認せよ、併しながら亦常に此の信仰に居り、其地位に進せんとを望むべし。聖靈に依頼して神の諸君に捺印し諸君を其の全領物として記號付けんとを願ひ奉るべし。諸君たゞ、跟くとあるも、亦我意の存するとを發見するとあるも、堅

く己の潔白を信じ、又我心の堅き深き願望は、萬事神にありて活きんとするにあるとを疑はず斷言せよ。

三　諸君が主にその萬事を献ぐるの能力も、將た又主の爲めに萬事たるべきの力も、一に是れ主が諸君の爲めに萬事を棄て、以て主自ら諸君の萬事たるの致す所なり。諸君此の一の事實を常に己が眼前に置きて忘るゝとあるなかれ。主が諸君のためになし給ひしものを信ずるとは、驕つて亦諸君が主のためになす所のものゝ能力たるなり

第卅八章　信仰の保證

『不信をもて神の約束を疑ふことなく反て其の信仰を篤くして神を尊め神は其約束し給ふ所を必ず成得べしと心に決む』――羅四〇廿、廿一

『小子よ我儕愛するに言と舌とを以て相愛する事なく行と實とを以てすべし是に由て我儕眞理より出しを知りかつ我儕心を主の前に安すべし』――約壹三〇十八、十九

『神の誡を守る者は神に居り神も亦かれに居るわれら其賜ふ所の靈に由て即ち其われらに居給ふことを知れり』――約壹三〇廿四、

イ申廿七、六廿八、十四、五〇、七〇、二〇、五〇、十約四〇四賽四廿

神の子たるものは皆信仰の保證を必要とす。即ち主我れを受け、我を其の子となしたまへりとの信仰の圓滿なる左券を要す。されば聖書による時は、信徒は皆己れの贖はれしことを知れるものとなす、今は己れの神の子たることを知れるものとなす、亦己れは永遠の生命を受けたることを知れるものとなす(イ)。諸君試みに思へ、子たるもの、其父が我を眞に其子と認めたりや否やも審らかならざるに、尙ほ能く此父を愛し、此父に事ふるを得るか萬々さるとあらざるべし。此點に就ては吾人前章に於て既に論述する所ありたり。されど信者往々にして、己れの無智、若しくは己れの不信に由り、再び暗黑に迷ひ入るとあり。此故を以て余は再應此に別章を設けて尙ほ論述する所あらんと欲す。

聖書は吾人の由て以て信仰の保證となすべきもの三を擧げたり、其第一は神の言を信ずるとなり。之に次では行なり。而して第三には此等の二者の中に存し、且つ此等の二者と共存する聖靈是れなり。

第一　神の言を信ずると。アブラハムは吾人に取りて信仰の大摸範者なり、而して亦信仰の保證の摸範者なり。果して然らばアブラハムの有せし信仰の保證に就ては聖書に何とありや。曰くアブラハムは約束を為し給ひし神、亦此の約束を實行し給ふきべきを充分に確信したりしなり。アブラハムの希望は只神より來り、亦神の約束し給ひしものより來れり。アブラハムは神に依賴して其命ぜさせ給ひしことを實行せり。さ

（約三、三〇廿五、同廿二、〇廿四、徒二十七、〇五、十二、十四、二、十一、十五、約壹廿、二、〇、十、一、）

れば神の約束はアブラハムに取りては唯一の信仰の保證にして、而して、無上完全の保證たりしなり(ロ)。

弱年の信徒にして神の言を信するのみを以て尚ほ充分の保證にあらずとなし、他に何ものかを得んと欲するもの多く是れあり。彼等は所爲へらく、保證即ち確實なる心内の感覺、心内の確信は信仰に添へて信仰の外に與へらるゝものなりと。是れ誤謬なり。我れは信用すべき人の言を聞かば此の他にまた別に保證を得ずとも、我れは安心し滿足す。神の言も亦た斯くの如くに吾人の信仰たらざるべからず。然るに人何物をか己れの内に求め亦た己れの感情に求むるが故に誤謬に陷るなり。然り、救ひは悉く皆神より來たるものなり。故に靈魂は己れの私や、己れ

（民廿、三〇詩十九、九〇、三八、十三、賽五十五、十四、九、）

（約壹三、〇十八、十九、）

の業に滿たさるべきにあらず、宜しく神に滿たさるべし。己れを忘れて神の道を聞き、信用を置くの價値あるものとして神の約束に依頼する人は、其の事だけにて已に信仰の充分なる保證を有す(ハ)。而して此人は約束を疑はず、信仰強く、神に榮光を歸し神の約束し給ひし所は必ず亦之を成就し給ふべきを充分に確信するなり

第二　次に聖書の擧ぐる所は行是れなり。是れ吾人が僞りなき愛もて吾人の心に保證を與ふるをいふなり(ニ)。此に注意して觀察すべき一事は他なし、最初信仰の保證の來たるは即ち約束を信ずるに由る行ひに由るにはあらずといふ是れなり。少しも神を敬はざる人の、一朝その恩寵を受くるや之れを聖言によりて知る。されど後に至り、行ひ之れに隨

生して其の保證となら、ざるべからず。『信仰は行爲に由りて全備を得るなり』とは此の謂なり(ホ)。人の樹木を植ゆるや、初めには果あることなし、されど之れを信仰に由りて植ゆ。己にして果を結ぶべき時來たり、尙ほ一顆の果をだも結ばざる時は、我れ即ち之れを疑ふて可なり。信仰また然りとす我れ若し最初に行ひはなきにもせよ、只神の言を信じて之れを我が保證となすこと明かならば、行ひは確かに之れに隨ひ來るべきなり。

*約十五〇、十四、加五〇、六、雅二〇、二、約壹十二、〇、三、四、

第三　さて以上の兩者――信仰より來る保證、行より來る保證――は共に聖靈より來るものなり。神の小供たるもの己が主の有なるとの確信を有するは只言にのみよるにあらず、亦只我行へる何某かの行にのみよるにもあらず。實に聖靈の器たる言によるなり亦聖靈の果なる行に由るなり(ヘ)。

約四〇十八、羅三、十三、〇十四、壹三、〇廿四、

ア、吾人をして我が生命としてイエスを信じ又イエスに居らしめよ。左すれば保證の是れなきを憂ふるには及ばざるべし。

オー我父なる神よ主の與へたまふ生命に於て主の約束に信實倚頼むとに於て主の命令に喜び從ふに於て信仰の保證を得るの道を敎へたまへ　願はくは主の聖靈をして我靈と偕に我の神の小供たるとを確むる證明たらしめたまへ　アーメン

一　信仰の保證の大切なる所以は他なし、神若し我を其の子として、我れを愛し我を認識し給ふや否やも審かならざるに、我は尙ほ其の子として神を愛し、神に事ふるは、是れ到底行ふべからざるの事なるが故なり。

二　聖書は全部を通ゝて信仰の保證に對する一大證據なり。されど聖書は信仰それ自身に就て語るが故に常に信仰の保證を故らに目はざるなり。アブラハムとモーセは共に神の己を受け給ひしと確知せり、若し然らざれば、二人は神に事へ神を信ずること能はざりしなるべし。イスラエル人は神の賜ひを受けたるを知れり、是故に彼等は神に事へざるべからざりしなり。果して然らば新約の一大救贖に於ては豈更に之に優れる保證なくして可ならんや。使徒等の手に成たる書翰は己の賜はれたる神の聖き小供なるを自知し、告白するものと認定せる人々に宛てゝ送りたるものなり。

三　信仰と從順は根と實との如く、互に相分つべからざるものなり。第一になかるべからざるものは根なり。而して根は初めより果あるにあらず、其果は若干時の後に至れば確かに登るものなり。信仰も亦然り、初めに活ける信仰を以て神の道を信ずといへども、其信仰は尙ほ果なきの保證なり。已にして時日を經れば、亦果の保證を得べし。而して信仰の保證が超然として群疑の上に立つに至るは、寔にイエスと共に生くるの生涯に於てなりとす。

四　信仰の保證は、告白に由りて助けらるゝと大方ならざるなり。我れ若し告白すれば、其事我に於て愈々判明し、我は堅く之が責を